



---

母さん、  
今日はパチンコ日和です。

---

べべ

---

\*

午後五時五十分になって、時田ユウキは副店長に呼ばれた。

ユウキはなぜ自分が呼ばれたのか全くわからなかったが、細長いロッカー室の裏にある小さな休憩室に連れていかれた。前を歩く副店長の肉付きのよい背中が大きく、弱さのない出来あがった大人を思わせた。まだ子供の延長線でしかない自分を、ユウキは恥ずかしくも虚しくも感じていた。副店長は、休憩室に置いてある丸テーブルの椅子に座るよう促した。幸いそこには誰もいなかった。ぎこちなく椅子をひいて座り、ユウキは思い切って質問をした。

「何かあったんですか？」

自分が気づかないところで、重大な失態でもしたのかもしれない……。いや、それとも……。不安が膨れ上がり、同時に少しの期待が頭をちらついた。

「いや、そうじゃないんだよ、時田くん」

「じゃ、なんで僕だけ……。何かまずいことしましたか？」

「いや、そうじゃないんだけどね、時田くんは大卒だし、就職活動してるんだろ？」

「え……。まあ。でも、ダメです、全然」

ハローワークにはたまに行っているものの、三度たて続けて面接で落とされてからは、積極的に申し込みをしていなかった。それに、自分が何の仕事に向いているのか、どんなジャンルを得意としているのか、わからなくなっていた。情報システム課を出て、在学中にパソコン関係の資格を取得したものの、求人情報を見てもたいして役にたつようなものではなかった。もしかしたら、たった今、自分の働きを評価して正社員にしてくれるのかもしれない。アルバイトから脱出して、安定の道を手にいれるのかもしれない。期待のほう膨らんでいた。しかし、そうではなかった。

「こんな小さなホームセンターでずっとバイトしてるわけにはいかないだろう？ このままいても、正社員にはなれないよ、はっきり言ってさ」

副店長はさばさばとした口調で言った。

ユウキは、大学時代からこのホームセンターでアルバイトをしていた。今年で三年目になる。木材などの資材運びなどの力仕事を主に任されていた。今まで無遅刻無欠勤で励んだ。レジが忙しいときは率先してやった。パートの女性が休んだときは代わりに出た。職場にもすっかり慣れ、入っているシフトはしっかりこなした。時には、時給がでない残業もやった。ただアルバイトという立場というだけで、後は何の変わりはなかった。今まで、頭の片隅には、このまま正社員になれるかもしれないという気持ちと、このままではいけないという気持ちが常にあった。ただ、辞めようとは思わなかった。

「社員は、皆、高卒なんだよ。そこに時田君のような優秀な人を入れるのは、こちらとしてはできないんだ。もっといい会社はたくさんあるよ。パソコンだってできるんだろうから。こんな景気の悪い時代でも、真剣に仕事を探せばあるよ」

「僕に……。ようするに、辞めろってことですか？」

「申し訳ない、本当に。時田君はすごく頑張ってたよ。いい会社に就職できるよう願ってるよ」

副店長は頭を深くさげた。

「今月いっぱいでもいいから。申し訳ないね」

ユウキは何も答えられずにいた。

一人暮らしをしていた。家賃も生活費も明日からどうしたらよいのだろうか。母が就職するまでと月に十万ほど送ってくれるが、それだけでは足りない。

「僕は、アルバイトでいいです。べつに正社員になろうだなんて思ってませんから」

焦ってそう言ったとき、後ろから靴音が聞こえて立ちどまった。

「あのう、今日からアルバイトの佐藤ですけど」

振り向くと、若い女の子が頼りなさそうにこちらを向いていた。

「僕は今日で辞めますよ。辞めろってことですよね。他の人雇っておいて、都合がいいじゃないですか！」

ユウキは頭にきて席を立ち、女の子の肩を突いて、自分のロッカーを開けて荷物を乱暴に取り出した。副店長も何も言ってくれなかった。引きとめもしない。ユウキはロッカーの扉を思い切り蹴り、走ってその場を去った。

自転車を力なく走らせ、アパートに戻った。部屋に入ると、大きな溜息をついた。

こんなことになるなんて思ってもいなかった。これから、この部屋を借りて生活ができるはずもなかった。今までのひと月のアルバイト代は八万ほどだった。時給七百五十円と週五日の仕事が、突然あぶくとなって消えた。家賃が三万五千円のワンルームだったが、自分一人では不自由はなかった。気ままでもあったが、もう少し稼いで広い部屋に移りたいと思っていた。だが、今からはそれができない。実家に戻ろうか。内科医をしている父親は、僕を医学部に入学させたかった。医学部にすべて落ちた僕を恨んでいる。とても帰れない。

部屋の中央の小さな丸テーブルに、朝飲みかけたお茶の入ったマグカップが置きっぱなしになっている。木製の椅子にどっかりと座り込んだ。

「どうしようか……」

明日からハローワークに通うにしても、バイトを解雇された人間を正社員として雇ってくれる会社があるのだろうか。狭いプライドだけが邪魔をして、自分をダメな人間と思い込んだ。しかし、なぜ僕は解雇されたのだろう。その理由がわからなかった。無遅刻無欠勤でまじめに働いてきた自分が、いきなり辞めさせられた。他の女の子を雇っておきながら。考えてもいい理由が思い浮かばなかった。きっと僕のことを副店長は嫌っていたにちがいない。それに自分は気づかなかっただけで、辞めさせたくてしかたがなかったのだ。そんな勝手な理由が頭を占めた。いや、そうではなく、自分がたいした人間ではなかったからだ。大卒で中途半端にアルバイトをしている人間に見切りをつけたかったにちがいない。友人たちは、皆就職していった。就職氷河期と世間で騒がれながらも、自分たちの希望を抑えて中小企業に職を決めていった。そんな友人たちから比べれば、明らかに自分はダメなのだ。彼らは自立している。まだ扶養から抜けずにバイト生活を送っている自分を、一人前の大人とは言えない。ああ、ダメな人間なのだ……。

そんなとき、携帯のベル音が部屋に響き渡った。ユウキは音が切れる寸前に出た。実家からだ。

「あ、はい……」

「ユウキ、何か必要なものがあったら送るわよ。お米はあるの？ ねえ、仕事はどう？ 就職、大変よねえ。ニュースで言ってた、大学出ても職がないって。ああ、イヤな世の中よねえ、誰がこんな時代にしたのかしら。ねえ、ユウキ、家に戻ってきなさいよ。こっちのほうが仕事あるわよ、きっと」

一方的に母親は喋った。

「お父さんの病院に勤めればいいじゃないの。不景気っていったって、病人は山ほどいるんだから。そうねえ、お父さんの病院、介護のほうもやるみたいだって言ってたから、ヘルパーの資格でもとればいいじゃないの。普通の会社なんかよりずっといいわよ。そうすればいいじゃない。ねえ？」

「父さんはさ、僕のことなんて許しやしないくせにさ」

「そんなことないわよ。ユウキに期待してただけ。怒ってなんかないから」

「いや、憎んでるよ。俺に似ないで出来の悪い息子だって言ったよ、大学落ちたとき。父さんの力を借りたくなんかないね。今、必要なものは何もないよ。じゃあね」

そう一方的に言うと、ユウキは携帯を切った。

仮に医学部に合格していたら、自分は迷いなく医者の方に進んでいざらう。そして、父親の病院に勤めたにちがいない。そんな過程などもちろんないが、そう想像するだけで胸が苦しくなる。これこそ雲泥の差だ。

マグカップに残っていたお茶を飲んだ。冷めきってまずかった。締め切ったブルーのカーテンが、閉鎖した空間に取り残された僕という自分の存在を隠していた。ぼんやりと宙を見ていた。昨夜、コンビニで買った夕食の残り物が流し台に置きっぱなしになっている。蠅の羽音が聞こえる。耳元で唸っているように聞こえ、そのうち一匹の蠅が目の前をぐるりと一周回った。

\*

翌日、昼過ぎまで寝ていた。いつもならバイトに出かけている時間だが、それがなくなって起きる意味がなくなった。ジーパンを穿いて黒いTシャツに着替え、コンビニに行こうとアパートの下まで行くと、ポストに茶封筒が入っているのが目についた。すぐを開けてみると、退職願と返信用封筒が入っていた。解雇されたというのに、退職願を書かないといけないのか。他には何も入っていない。部屋に戻り、名前を書いて印鑑を押したが、理由は書かなかった。書けなかったのだ。一身上の都合でもなかった。仕方がないので、そのまま封をしてアパートの部屋を後にした。

「なんつうことだよ。ああ、むかつく」

自転車を走らせ、アパートから五十メートルほどいったところにある郵便局のポストに投函し、その近所にあるコンビニに入った。今日は何も食べていないのに、いまだに食欲がなかった。パンを見ても菓子を見ても、何を見ても空っぽの胃は受けつけてくれそうになかった。仕方なく、雑誌が置いてある棚の前に立ち、つまらない週刊誌を手にとってみた。『女優Aが、あのイケメン俳優とお泊まり密会』の大きな見出し。ぼんやりと見つめ、自分とは反対側にいる人間たちを卑屈に思った。黙っていても世間から注目される男女と、誰からも必要とされなくなった自分。マスコミが作り上げ、メディアはそれを取り上げ、世間では騒いでいる。華やかで大金が飛び交う世界。ユウキは、勝手にそんな世界をイメージし、自分とは無縁であり、自分はどうでもいい存在だと思い込んだ。

「くっそお……」

ふいに口をついて出た。アルバイトを辞めさせられたことのダメージから、立ち直れずにいた。

そして、隣の棚にあった『失業から復帰する方法』という見出しの冊子を手にした。ざっとめくると、『ハローワークに僕は十年間通いました』という人の対談があった。さまざまな会社に翻弄され、屈辱を味わったエピソードが延々と書かれている。ユウキは思った。自分もハローワークに行かなくては……と。

その足で、ユウキは自転車で乗って駅まで行き、電車に乗った。川口駅まで、乗り継いで二十分ほどかかった。駅から三分ほど歩き、ハローワークに着いた。以前に何度も行ったことがあったが、そのとき以上に混んでいた。パソコンの検索待ちに二十人くらいいる。

「二十一人目になりますが、どうしますかぁ？ 一時間以上はお待ちいただくことになりますが。それでもお待ちになりますか？」

受付の若い女性が、まるで帰れと言わんばかりだった。

「……じゃあ、また来ます」

ユウキはそう言い、その場を離れた。

せっかく来たのに、こんなに混んでは検索すらできない。家にパソコンがあればそれで検索すればよいが、一ヶ月前にパソコンがフリーズしてから起動すらできなくなっていた。ネット喫茶にでも行こうかとも思ったが、熱意が急に冷めて脱力感に襲われた。

駅近くのコーヒーショップに寄り、砂糖を倍入れて啜りながら携帯をいじった。最初はアルバイトのサイトを見ていたが、だんだん退屈してきて、昔のメールを見ていた。大学に入学する前に機種変更をした携帯を、いまだに使っていた。大学時代に沢山メールをしたはずなのに、受信ボックスの一番最後にこんなメールが入っていた。

『ユウちゃん、ほんとに私のこと嫌いになった？ もうやり直そうとか、そういう気はほんとにないの？ 私は今でもユウちゃんのこと好きだよ』

高校時代付き合っていた彼女からのメール。このメールだけ保護してあった。なぜだろう。高校を卒業間近になって、彼女に飽きていった。冷めていった。そのまま、メールの返信もせず、無視した形を自らとっていた。大学での生活で、彼女くらいできるだろうと思っていたが、全くできなかった。僕のことを好きになってくれたのは、彼女くらいだろう。あのとき、やり直しておけばよかった……。突然、懐かしくなった。まるで、たった今送られてきたメールのよ

うに思えてならなかった。

『早紀のこと、嫌いになってないよ。今でも好きだよ。やり直したい。メールくれないかな?』

そんなことを書き、迷わず送信してしまった。すると、すぐにメールが送られてきた。『不明のメールアドレスです』

ああ、そりゃそうだ、もう五年もたっているのだから。ユウキは甘ったるいコーヒーをひと口飲み、目覚めたように理解した。

コーヒーショップを出て、駅に向かう途中、ふと立ちどまった。

『今日はお客様感謝デー！ すべてのお客様に捧げます！ 感動の一日を！』

の垂れ幕に大きな文字。パチンコ店の前だった。ユウキは、今までパチンコなどやったことがなかったが、感動の一日という言葉につられて中に入った。すると、一瞬にして、煙草臭さともものすごい騒音に包まれた。

「いらっしやいませー！」

と可愛らしい女性店員が笑顔で出迎えてくれた。少しいい気分になって、奥へと足を運んだ。パチンコ台に向かっている中高年の男性の後ろを通り、赤い台が並んでいるところで立ちどまった。台を見ると、白いドレス姿のポニーテールの赤い髪をした可愛らしい女の子と動物たちが画面に映っている。アニメでもなく、漫画でもなかった。懐かしい童話のようだった。不思議とそそれ、一番端の席に座った。ただ、どうやっていいのかわからなかった。パチンコ台の中央の画面を見つめていた。しばらくそうしていると、

「お客様、こちらにお札を入れていただき、このボタンを押しますと玉が出ます。そして、このハンドルを動かすと玉がこちらに弾かれて出ます。中央に入れていただくと、画面が動きます……」

あの可愛らしい女性店員が、騒音に負けにくいくらい大きな声でそう言って説明してくれた。

ユウキは恥ずかしそうに笑い、財布から千円を出した。台の横の左上の部分から、千円札はすぐに吸い込まれていった。言われるままに玉を出し、ハンドルを右斜めに傾かせると、玉は弾かれて台の中を流れた。そして、中央に玉が入ると画面が動き出した。簡単なことだった。

「何かわからないことがございましたら、またお聞きくださいませ。それでは、失礼致します」

女性店員は丁寧に頭をさげ、どこかへ行ってしまった。名残惜しさがあつたが、動き出した画面を見つめていた。台の上には『動物ストーリー』と書かれている。ゾウ・キリン・パンダ・コアラ・オオカミ・フラミンゴ・オウム・シロクマ・ネコ・ライオン。それらが、テンポのよい音楽とともに、森の絵が背景の画面の中を右から左に流れては、とまった。そして、玉が中央に入ると、また回る。ユウキは回る画面を見つめながら、やっとわかった。三つ揃えば、当たりというわけか。

しばらく画面を見つめ、ハンドルを同じ角度に傾けていると、玉があつという間になくなった。言われた通りにボタンをまた押すと、玉が流れるようになってきた。そして、すぐに玉は弾かれて台の中を流れた。真ん中に入れば画面が回る。途中、ハンドルがぶれて玉が乱れて一周回った。ただ、その繰り返し。画面を見つめても三つの絵が揃う様子もない。なんだ、これだけか。このずっと繰り返しか。そう思った瞬間だった。ハチの群が右から左へ走っていき、激アツと誰かが叫んだ。アツと声をあげる間もなく、縦にパンダが三つ並んだ。すると、赤い髪の女の子がでてきて、

「やったね！ スーパーラッキー！」

と言って、にっこり微笑んでピースをした。

呆然と画面を見ていたら、玉が下からじゃらじゃらと出てきた。軽快な音楽が流れ、玉を弾き続けていた。すぐに、玉は箱いっぱいになった。台から玉が出続け、いっぱいの箱をどうしようかと思っていると、隣にきた野球帽を被った年配の男性が上のボタンを押した。

「これじゃ、溢れちゃうだろ。店員呼ばなきゃ」

台の上のところに、呼び出しボタンがあつた。すると、すぐにさっきの女性店員が来てくれ、いっぱいになった箱を下におろし、新しい箱を前に置いてくれた。

「チャンス！」

と画面に出たと思うと、動物たちの図柄が回った。さきほどよりテンポが速く、台の中央の少し下にある扉のような部位が継続的に開いて玉を沢山拾っていた。途切れることなく、画面が回っていく。ユウキは何も考えずに見つめ、我を忘

れて胸がドキドキした。すると、またハチの群が現れ、台の上の中央の太陽のようなマークがキューーンと鳴って光った。今度はフラミンゴが三つとまった。フラミンゴの目がハートマークになっていた。音楽が流れ、玉が沢山出た。すぐに箱いっぱいになり、店員を呼んで新しい箱を置いてもらった。

それから次々と同じ図柄が揃い、後ろを見ると、十箱にもなっていた。

「この玉、どうするんだ」

そう言ったが、騒音で誰にも聞こえなかった。

また野球帽の男性がやってきて、耳元で呟いた。

「あんた、すごいねえ。今日の当たり台だなあ。俺は三万もすっちゃったよ。昔はよく当たったんだけどねえ。今年になってからは全然ダメだ」

そんな話に耳を傾けていると、ライオンの図柄が揃った。

「いやあ、あんた、ついてるよ、ほんと」

肩をポンッと叩くと、出口のほうへ向かって行ってしまった。

ユウキは画面を凝視し、久しぶりに胸の鼓動が高鳴っていた。玉が山ほど出た。心の中で、やったあと叫んだ。その後も、次々と当たった。玉が出て、また当たりの繰り返し。しばらくそれを続けていると、途端に当たらなくなった。箱から玉を足していったが、全く当たらなかった。仕方がないので、呼び出しボタンを押した。すぐに若い男性店員がやってきて、

「終わりにしますか？」

と言われたので、大きく頷いた。

店員は後ろの箱を運び、通路の端に設置してある計測機のようなところに一箱ずつ玉を流していく。一体、何箱あるのかわからないくらいだった。しばらくそこに突っ立って、店員が玉を流し終わるのを眺めていた。

「こちらになります。ありがとうございました」

そうレシートのようなものを渡してくれた。

『21525』

と書かれている。

「これはどうすればいいんですか？」

と、店員に尋ねると、えっという顔をしながらも、

「あちらで景品と交換してください」

と丁寧な口調でレジのようなところまで案内してくれた。言われるままレシートのような紙を渡すと、最初に説明してくれた女性店員が、

「ご確認お願いします。大景品が十七枚に、中景品一枚」

とレシートにチェックをしているのを、ユウキは黙って見つめた。大景品に中景品とは一体何だろうか。十七枚とは一体何だろう。全くわからなかったが、言われるままに頷いた。

「あとの百玉は、ドリンクなどございますが、どうされますか？」

とドリンク類の置いてあるケースを指したので、やはり頷いた。

「こちらでよろしいですか？」

と、缶コーヒーを取ったので、小さく頷いた。

そして、

赤いカードのようなものを十七まで数え、緑のカードを一枚つけて揃えて渡してくれた。

「ありがとうございました」

深く頭を下げられた。

カードを持ったものの、これは何なのだろうか。こんなカードのようなものをもらってもどうしようもなかった。

ユウキは、優しそうな女性店員の顔をちらりと見ながら、

「これはどうすればいいんですか？」

と、もぞもぞと尋ねた。

「ええ、えー、皆様、店舗の裏のほうに行かれますが、詳しくはわかりません」

そう言って、困った顔をした。

しゅしゅ、ユウキは店を出て、その裏のほうへ向かった。なんだかわからなかったが、ビルの横の隠れたような小屋に、自分が手にしているカードと同じものが、赤、緑、青の順で壁に貼られていた。そこへ行き、わけもわからずカードを置いた。窓からは顔も見えないが、窓の下から手だけがでてきてカードを中に入れ、しばらくして札束が出てきた。それを手にし、数えたら、八万六千円。

「嘘だろ」

ユウキは声をあげた。

当てた賞金としてこんなにもらえたわけか。すぐに財布にしまった。一ヶ月のバイト代と同じくらいだ。パチンコ台に入れたのはたった千円だけ。それがこんなになって返ってくるなんて。とたんに気分が高揚した。たった、一日の数時間でこんなに稼げるのか。ユウキはクックッと小さく笑った。今まで毎日行っていたバイトは一体何だったんだ。金を得るなんて簡単なことじゃないか。一瞬にしてこんな大金を得たことで、ユウキは嬉しくもあり、不思議でもあった。

「やった、やったじゃん！ ラッキーだよ」

ユウキは金に換えてくれた小屋から離れ、捨てたもんじじゃないと思って空を見上げた。まだ夕陽にも染められていない、晴れ渡った青い空だった。

ユウキはすぐにアパートに帰宅した。こんな大金を持ち歩くのは危ないという気持ちが強かった。しかし、一瞬にして八万六千円という金を手に入れたものの、冷静になると、たかが八万六千円かあというつまらない欲に駆られた。世間では宝くじの数億円が大金なのだろうが、そのうちの微塵にもならない金だ。ちよと一ヶ月分のアルバイト代と同じ。正社員なら一ヶ月数十万もらってもいいくらいなのに、自分はそれすら得ることはなかった。ユウキは、自分の境遇を考え、なぜか惨めに感じた。机に座り、目の前に八万六千円を置いて眺めながら、つましい気分でやるせなかった。それにしても、贅沢を言っているはどうしようもない。パチンコをやって当たった賞金じゃないか。

「貯金しようか」

ふと呟いた。

将来のことを考えて貯金したほうがいい。何かのときに必要になるだろう。真面目な性格のユウキは、この金をどうしようかと真剣に考えた。そして、これがバイト代だったら何に使うだろう。食費に光熱費……。家からの仕送りを併せて余った金は、微塵でも貯金にあてていた。質素なものだった。毎月の切り詰めた生活と、ゆとりを自分に与えない日々。ユウキは、こんな金、降って湧いたようなものではないか。今まで真面目に生活してきた褒美にちがいない。

ユウキはあれこれ考えたあげく、新しいパソコンを買うことに決めた。フリーズしたパソコンを再セットアップするも面倒だ。どうせなら買ってしまったほうがいい。パソコンを買えば、ハローワークに行かなくても検索もできるし、アルバイトも探すこともできる。予算は五万円以下と設定した。ユウキにとって真面目な選択だった。

早速、市内の電気屋に行き、一番安い四万九千八百円のノートパソコンを買った。これでよかったのだ。あの金が自分の生活の必需品に化けたのだ。

ユウキは、新しいパソコンをセッティングしながら、なんだか得をした気分になった。正しい使い道をしたことで、納得することができたのだ。そして、こんなことも思った。また、あそこに行って当てよう。当てて金をもらおう。仕事を探すまで、生活のちょっとした足しにしよう。今度は、一年も干していない布団を捨てて、新しいものを買おう。そう思いながら、なかなか起動しないパソコンの画面を見つめた。

\*

翌日の午前十時頃になると、また川口駅まで行き、あのパチンコ店に入った。昨日は気づかなかったが、看板を見ると、クィーングリーンという名前のパチンコ店。ドアの向こうは、昨日と同じく、騒音とタバコの臭いで店内は包まれていた。ユウキは今までタバコを吸ったことがなかった。大学時代の周りの仲間たちはタバコを得意げに吸っていたが、ユウキは一度も吸ったことはなかった。母方の叔父がヘビースモーカーで肺ガンになり、四年前に苦しみながら死んでから、自分は絶対にタバコは吸わないと誓っていた。タバコのせいで肺ガンになったのよ、と口癖のように言っていた母の言葉と、見舞いに行ったとき枯れ木のように痩せた叔父が、タバコなんか吸うんじゃないと言った姿が、絶対に吸ってはいけないとユウキの心に刻ませたのだ。

「くっせえな」

そう言いながらも、奥へ奥へと進んでいった。そして、昨日打ったパチンコ台の前で座った。隣には六十代くらいの女性が座って、先に打っていた。同じ動物ストーリーという赤いパチンコ台だ。

ユウキは財布から千円札を取り出し、昨日と同じように台の左上の入り口から吸い込ませた。後は玉を出し、ハンドルを傾かせて弾かせ、中央に玉が入れば画面が回りだす。いつもと同じ作業をしているのに、昨日に比べ玉が入りにくく、五百円分の玉で八回しか入らなかった。すぐに玉がなくなったので、また出して打ち出したが、今度は四回。あっという間に千円分の玉がなくなった。

「なんなんだよ。おかしい、昨日は当たったのに」

ユウキは、また千円を入れた。玉が入って画面が回りだしても、三つの図柄はなかなか揃わない。そうこうしているうちに、隣の女性の台が当たり、

「スーパーラッキー！」

と言って音楽が流れた。それが何度も続いた。隣が当たれば当たるほど、ユウキは焦って千円札を台に入れ込んだ。五千円入れたところで、今度は一万円を入れた。けれども、いくら玉を入れても図柄が揃うことがない。苛々し、また一万円入れた。隣の女性がタバコを吸い始めた。ユウキは悔しいやら、腹がたち、

「タバコ吸わないでくださいよ！ 僕は、タバコ嫌いなんすよ！」

と声を荒げた。

「はいはい、わかりましたよお。負けてるからって、ムキにならなかつたってねえ」

そう言って、クスクスと笑った。

ユウキは知らず知らずのうちに、三万五千円も入れ込んでいた。

「もうやめたら～。これ以上やっても当たらなさそうよ。だいたい回ってないもの。三百八十二回しか回ってないじゃないの。悪すぎよね。やめといたほうがいいわよ。このまま五万とか使っちゃうわよ。」

女性は台の上を見ながら、ユウキの耳元で呟いた。

デジタルの赤い数字で382と書かれている。これが玉が中央に入った数で、いわゆる回った数というのか。多いのか少ないのかわからなかったが、妙に断言してくるこの女性が言うようにやめたほうがよいのだろう。それに、五万と聞いて、ユウキは怖くなって手を止めた。もう三万六千円使っていた。

席を立ち、そのまま出口に向かった。自分が向かっていたパチンコ台の列にはさほど人はいなかった。十台ほどあるなかにさっきの女性が一人。その席の裏には玉がいっぱいになった箱が三箱置いてあるのみ。出口からふと右側を見ると、満席になっている列を発見した。『ここからは1パチ』と看板に書かれ、『安くて、4倍遊べる！』と大きく書かれていた。突っ立っていると、男性店員が、

「どうですか？ 一円パチンコ。安くてたくさん遊べますよ」

と言った。自分は、たった今、三万六千円もすったのだ。だいたい、遊ぼうという気分などさらさらしない。こんな大金



を台にかけてのに、一度も当たらない。ただ腹がたって黙って出口に向かおうとすると、店員は、ありがとうございます！と元気のよい声をかけた。

すぐにアパートに帰り、パソコンで『一パチ』と検索した。

『一元パチンコは、千円でパチンコ玉が千個でる。当たりやすくはあるが、当たっても一玉が一円なので、たいした儲けにならない。最近では、等価での換金が増えてきたが、そうでないところもある』

と書かれているのを見つけた。

だったら、一円でこつこつ当てればよいではないか。

昨日と今日でプラスマイナスゼロになったものの、それはなかったこととすればよい。いや、パソコンを買ってしまった。パチンコで勝たなければ、パソコンは買わなかった。フリーズしたパソコンを再セットアップすれば、まだ充分使えたはずだ。そう思うと、ユウキはひどく後悔した。せめて、パソコン代だけでも取り返したい。そして、普通に就職活動をしたい。約五万円。それだけ、たったそれだけでいい。取り返そう。ユウキは今日すった金額の多さに凹んだまま、夕方のまだ四時だというのに湿っぽい布団に潜り込んだ。布団を買うという目的も消えた。

「ああ……ああ、くそお！」

布団の中で、大きな溜息をついた。

\*

また翌日、ユウキはパチンコ店に向かった。ただパソコン代を取り返しに行くというだけの理由だった。バカバカしいと思いながらも、どうしてもおおよそ五万円の金が惜しく感じてならなかった。

そのクィーングリーンというパチンコ店の前まで行くと、携帯が鳴った。すぐに出ると、この前までバイトをしていたホームセンターの副店長だった。

「あ、時田君。退職願なんか送らせてしまって悪かったね。時田君のこと、私は評価してるし、いい就職先が見つかることを願っていますから」

今頃言われるなんて、心外だ。謝ったところで、自分にとって何のプラスにならない。荒海に放り出されたようなものだ。ユウキは気がたっていた。副店長が何か言っていたが、携帯を耳から遠ざけてぶちりと切った。

そのまま店内に入り、昨日気になった一元パチンコのコーナーに入った。午前十時三十分。そのコーナーだけ満席に近かった。六十代と思われる男女が多い。人が多いだけに、タバコの煙がもくもくと立ち上がっている。赤、緑、黄色の台がそれぞれあるが、どれも動物ストーリーだった。ユウキは、一番端から二番目の緑色の台についた。

ユウキはこんな計画を立てていた。一元パチンコで、一日五千円プラスさせる。そして、十日通えばいい。それでパチンコをやめる。そう計画通りにいかななくても、一ヶ月もあればどうにか取り戻せるだろう。そう安易に考えていた。

台に千円札を入れた。その瞬間、ドキドキして手に汗を握った。同じように玉を出した。一回で二百円ずつ、二百玉が出てくる。四円パチンコに比べると、玉の量が多かった。これなら……と微かに期待した。しかし、当たる気配もなく、八百円までの玉を使いきった。そして、千円分の玉もすぐになくなった。しびしび千円札を財布から出し、台に入れようとしたとき、隣に若い女性が座ったのに気づいた。白いTシャツで、ロングの金色に近い茶髪。目だけをその女性に向けると、胸のあたりが茶色く突起しているのが目立っていた。ブラジャーをつけていない。しかも、白いTシャツから透けてやたらと目立って見える。ユウキはどぎまぎしながらも、台をまっすぐ見つめて打ったものの、玉が乱れて右へ一回転してばかりいた。そんなことを続けて全部で二千円費やしてしまった。当たりは一度もない。

「ねえ、いくら使ったの？」

突然、その女性が耳元で囁いた。

「え、あ、二千円……けど」

ユウキは台を見つめながら言った。

「二千円かあ。もう取り戻せないよ、きつと。やめたほうがいいよ。先週までは等価じゃなかったの。そのときは三十とか四十とか一日の当たりがあったけど、等価じゃなくなったら、一日十も当たらなくなったのよ。ね、ちょっと見て」

いきなり立ち上がり、台の履歴のボタンを押し、昨日一昨日の当たり数を見せた。七回、十一回だった。

「今日のこの台は0回でまだ当たってないけど、もう二千円入れちゃったし、遊パチだし、無理よ」

「え、ユウパチ？」

「知らないの？ 遊パチって当たりやすいけど、当たっても玉が出ないし、当たりの連チャンは少ない台なのよ。遊びが目的っていうか。ほら、ここに遊パチって書いてあるでしょ。一パチは遊パチがほとんどだよ」

そう言って、台を指さした。その先をよく見ると、遊パチの言葉が台の中に書かれていた。

「あ、ほんとだ……」

何も知らないユウキは、少しだけ驚いて、彼女にたいして尊敬の眼差しを向けた。

「でも、今は遊パチも何もないけどね。当たりにくくなったし。前はちょっとでも当たると嬉しかったけどね。等価になったら、客が少なくなったよね。一パチだけは人気あるけど」

その女性は、ユウキの耳元に口をつけるほど近づけ、

「もうやめといたほうがいいよ、他の台はいっぱいだし。今日はついてなかったってことで」

と言って立ち上がり、背もたれに掛けてあった黒のカーディガンを羽織り、ユウキの腕を掴んで外へ出るよう引っ張った。ユウキはこんな行為に胸が高鳴り、気さくに話してくれたこの女性とずっと話してしてみたいと思った。

そのまま店の外に出ると、

「ああ、今日は一円も使わなくてよかったあ」

と言って深く呼吸をすると、その女性は穿いている黒のジャージのズボンをパタパタと両手で叩いた。

「寝起きのまま来ちゃった。黒のジャージってやばいよね」

「いや、大丈夫だよ。部活みたいな感じで」

「いやだあ、もう二十五になるのに、部活なんて〜」

彼女は声を出してケラケラと笑った。寝起きのままパチンコ店に来ることに、ユウキは少し呆れたものの、そんな表情は微塵も見せなかった。それより、構えもなく自分に話しかけてくれることが嬉しくてならなかった。

「お腹すいてるんだ、ちょっと何か食べたいな」

「じゃ、そこで食べる？」

向かい合いにハンバーガーショップがあった。すぐに店に入ると、メニュー表を指さして、彼女と同じものを頼んだ。百五十円のハンバーガーと百三十円のコーヒー。ユウキが払うと、

「おごってくれて、ありがとう。二千円無駄したのに」

と、彼女は言った。そんな礼の言葉にユウキは嬉しくて、

「なんってことないよ」

と言って、小さく笑った。

二階の席に着いた。周りには一人しか客がいなかった。

「僕は君より年下だよ。二十三歳。バイトがクビになったばかりなんだ」

不思議なくらい自然に自分のことが話せる。初対面だったら敬語を使うのに、それをする必要がないくらい彼女の言葉や振る舞いは自然だったのだ。

「私は仕事してないの。いわゆる無職ってやつ。そのくせ、パチンコやっちゃう。週に三、四回。前は一パチの数百円のプラスでも満足してたんだけど。昨日は四千円使っちゃった。ダメだよ。ダメだってわかってるんだけど、やっちゃうんだから。私ってさあ」

真正面から顔を見た。年上の割には、丸顔で幼い顔をしていた。子猫のように目が大きく、鼻が小さく、可愛らしくユウキには映った。ストレートの茶色の髪は、色が抜けて光に反射してキラキラと光っている。でも、なんで僕なんかには……。そんな気持ちが拭えなかった。こんな可愛らしい少女のような女性は、自分みたいに地味な顔だちで真面目な人間には似合わない気がした。

「ねえ、パチンコ初心者でしょ？　なんでやりはじめたの？」

そう聞かれ、バイトを解雇されてから立ち寄ったパチンコ店でのこととその収支、そして取り返したいパソコン代のことなどを話した。

「ふうん。四円で当たれば一日で返せるときもあるけど。パソコン新しく買ったって思えばそれでいいんじゃないの？」

「いや、僕は今仕事してないし、無駄な金を使いたくないんだ。パチンコをやめるためにやるんだから。どうしても取り戻してからやめたいんだ」

「そんな、ムキになっちゃって。年下の子って可愛いなあ、そういうところが。で、いくら返したいんだっけ？」

「五万」

互いにハンバーガーを頬張った。

「じゃ、手伝ってあげる。一日に使う金額を決めて、二人で違う台をやって当たりを出すの。そうすれば早いでしょ？」

「うん、そうだね」

「でも、お金はそっちもちよ」

「うん、それでいいよ」

そう話がまとまると、なぜか無言になった。女性はコーヒーを左手に、右手で携帯をいじり始めた。

「ね、メルアド教えてよ」

「うん、あ、これ」

ユウキは迷いもなく、自分のアドレスを表示した携帯を見せた。彼女はそれを見て、自分の携帯に入力し、しばらくして呟いた。

「送った……」

「なにを？」

「私のメールアドレスと携帯番号、それから名前」

ユウキの携帯が鳴った。メールを開くと、アドレスと携帯番号が書かれていた。

「民野香織さん」

「うん、カオリンって呼んでね」

「えっ、……うん」

ユウキは戸惑いながら頷き、自分の携帯番号と名前を民野香織に送った。

「時田ユウキ君ね、わかった。ありがと。そろそろ行こうかな。もうお昼だし、帰ろ。明日、十時半にあの店で、どう？  
それとも、他の店にする？」

「いや、あの店ですったんだから、あそこで取り返すさ」

ユウキがムキになって言うと、香織はフフッと笑った。

「こんな格好だとまずいから、帰る。みっともないからさ、ノーブラだし」

香織は立ち上がり、手を左右に軽く振った。

ユウキも手を中途半端にあげた。じゃ、また……と聞こえないくらいの声で言い、香織の後ろ姿をずっと見つめていた

。

\*

アパートに帰り、ユウキは、あの民野香織という女がなぜ自分に手を貸してくれようとしているのか不思議に思えてならなかった。ただパチンコ店で隣に座ったというだけだ。相手の素性も知らない。顔と服装、話し方くらいのものだ。自分に好意を抱くわけもない。何の展望もなく、昼間からパチンコ台に向かう僕は、ただのぐうたらでだらしない男でしかない。あの子も自分と同じ境遇なのだろうか。無職で、顔も洗わずにパチンコ店に出てくる、墮落的な女なのだろう。ユウキはそんな女は嫌だと思った。ごく普通に大学を出て、就職をして、人並みにお洒落をし、パチンコ店などには行かない自立した女性。そんな人が好きだ。いや、そういう自分は何も出来ていない。そのくせ、人にたいする要求だけは厳しい。なんて自分は愚かなのだろうか。結局、自分はその子と同じレベルでしかない。おかしなプライドだけが邪魔をするものの、最後は自分を踏み潰した。

澱んだ空気が部屋中に浮かんでいて、ユウキは窓を開けた。部屋の前には公園があり、幼い子供たちが声をあげてはしゃいでいる。僕にもそんな時代があっただろうか。そう思い、何も思い出せないことに気づくと恐ろしくもあった。

「あんな子供に戻りたいなあ」

ボールを蹴っている男の子たちに、滑り台の上でキャーキャー声をあげている女の子たち。何がそんなに楽しいのかわからない。十年前の僕は十三歳だった。立派な子供だったんだ。二十三になっても、大人にはまだなれきれていない。

「仕事、探さない」と

そう言って、白のレースのカーテンをひいて、パソコンを起動させた。

ハローワークや求人サイトから検索していると、二、三時間はあっという間に過ぎていく。いろんな職種にいろんな地域、それぞれの賃金、アルバイトやパート、派遣、正社員……、限りなくある。けれども、自分も持っている資格や就業場所、企業が厳しく求めようとしているものをどんどん削り取っていくと、自分に当てはまるところがほとんどない。数多く募集している携帯電話のPRスタッフさえ、自分には当てはまらないような気がして、次の求人を目で追ってしまう。経験不問のホテルの掃除も、回転寿司のスタッフも、警備員も、介護施設の職員も、どれも違う気がした。そうこうしているうちに疲れ果て、溜息をついて椅子の背もたれに背中を反らせた。

「何でもやりゃあいいのかもしれないけどさあ」

ユウキは左目に左の手のひらを当て、捨てられない自分の将来と捨てたいプライドの中でもがいていた。

一息つき、なんとなくテレビをつけた。すると、見知らぬ評論家が、

「介護の仕事なんて山ほどあるんですよ、若者はそれを知らなすぎるんです。昔でいう、いわゆる3Kとか言われる仕事はまだまだあるんです。若いんだから、率先してそういう仕事に就くようにしないと、日本の未来はありませんよ」

と言い、他の評論家らしい男性が、

「じゃ、介護の仕事が3Kだってことですか？」

と言う。

「きついじゃないですか？ 違いますか？」

「じゃあ、あなたが二十歳の若者だったら、介護の仕事就きますか？」

と言っている。

「ああ、はい、就きますよ。仕事があれば何だって」

「いやあ、就かないでしょ。顔に嘘だって書いてありますよ」

皮肉混じりの討論が繰り広げられている。

「うざい！」

ユウキはすぐにテレビの電源を切り、つけっぱなしのパソコンを横にどけて、机に両腕をついてうつ伏した。暗くなった目の前で、パチンコ台が浮かんで動物たちがくるくると回った。その映像は途切れることなく回り続けた。ユウキはそ

のまま睡魔に襲われた。十分もたたないうちに寢息をたて、カーテン越しから夕陽が部屋に射し込んできた。

\*

翌日午前十時半、同じパチンコ店に行き、一円パチンコのコーナーの一番端の台に座っていると、香織が黒のジャージのズボンと緑色のTシャツ姿で現れた。他の五、六十代の男性客が、

「香織ちゃん、おはよう」

「おはようさん」

「あ、香織ちゃん、まだ当たってないよ」

と声を掛けている。

「皆、おはよお」

香織はそう言って、手を軽く振ってにっこりしている。他の客と仲がいいのだろうか。ユウキはおかしな嫉妬心に煽られながら、香織が自分の元に来るのを待った。

「ユウキ君、おはよ。もう始めてる？」

香織の胸が揺れて見えた。ブラジャーは昨日と同様、つけていないようだった。

「ね、じゃ、始めようっか」

香織はユウキの目の前に手を出した。ユウキがえっとした顔を見ると、香織は口をすぼめた。

「約束したじゃない。私が手伝うって」

「ああ、そうだったね」

「そうね、千円。千円で当たりをひくように頑張るから」

ユウキは千円を財布から出し、香織に渡した。香織はユウキと反対側の一番端の台に座った。ユウキは台に向かい、千円札を入れてすぐに玉を出して回し始めた。すると、始めて三分もたたないうちに、台の画面に赤い髪の女の子の顔がアップで出てきて、

「もしかすると、もしかするかもお」

と明るく言い放ち、

「超激アツよ！」

と強く言った。

ユウキの鼓動は速くなった。映像にライオンが口を開いてこちらに向かってガォォーと叫んできたかと思うと、あっという間にライオンが三つ揃った。当たった！心の中で叫んだ。その瞬間、快感で全てが満たされる感覚と興奮に陥った。

「あ、当たったんだあ。すごいじゃん。ねえ、もう千円くれる？ 今チャンスなんだけど、なかなか当たらなくて」

香織がそう言って、ユウキの肩に手を置いた。ユウキは迷わず千円札を香織にあげた。

「連チャンが終わったらやめたほうがいいよ。続けてやっても、損するだけだし」

「うん、わかった」

香織はそそくさと自分に台に戻っていった。香織からのアドバイスを聞き、六回連続で当たりが終わり、すぐにやめた。店員を呼び、玉を運んで機械で計ってもらおうと、2740玉だった。そのままカウンターのところへ行き、景品に変えてもらった。換金できない分は缶コーヒーにしてもらった。香織がまだ台のところにいたので、店を出て、換金所へ行った。二千五百円。二百円分の玉で当たりをひいたため、プラス二千三百円だった。それを財布に仕舞いながら店に戻ると、香織がドアのところに立っていた。

「当たらなかった。ダメね。こういうのって運が左右するんだよね、がっかり」

「まあ、いいよ。僕が当たったしね、二千五百円」

「私のと合わせると、プラス……」

「……三百円」

ユウキはふとそれらが自分の金であり、たいした額ではないことを知ると一気にテンションが下がった。

「でも、大丈夫だよ。マイナスになったわけじゃないし」

香織は明るい声で、ユウキの肩をトントンと軽く叩いた。ユウキは複雑な気分になりながら、店を出た。

「私の車乗ってく？ ちょっと手伝ってほしいことがあるんだけど」

香織がそう言うので、店の駐車場に行き、紫色の軽自動車の助手席に乗り込んだ。後ろには段ボールが山となって置かれている。

「この車、おねえちゃんと兼用なんだ。それで、その段ボール、私の部屋に運んでほしいんだ」

「何入ってるの？」

「ブランドのバッグ。おねえちゃんがリサイクルショップに勤めててね、買い取ったのを加工して綺麗にして、オークションで売ってるんだ」

「……へえ」

「だいたい、夜に締め切ってるんだけどね、三日置きくらいに。結構いい値になるんだ。高くつくと、四、五十万とか。もちろん、落札されないときもあるけどね」

香織はゆっくりと運転し、大通りに向かって走らせた。

「すごい値段だね」

ユウキには、ブランドバッグの値段など全くわからず、それだけの価値を求めて買う人達の気持ちがしれなかった。だいたい、一カ月分の給料以上ではないか。世の中には、貧しさとは無縁に暮らしている人もいるのだろう。そんなことを思いながら、その値段の高さに、ただただ感心せざるを得なかった。

「こういうのって、好きな人は好きだし。高く売れば、こっちのものだしね」

「そういうものなの？」

「……うん」

行きかう車に目をやりながら、ユウキは車窓からの景色をぼんやりと見つめた。

少しすると、香織は急に大きな溜息をついて話し始めた。

「……でも、おねえちゃん、私に一円もお金くれないんだ。オークションやってるのは私なのに。おねえちゃんは、そのお金で海外旅行行ったり、高い化粧品買ったりしてるの」

「え？ ……それってひどいね」

ユウキがそう言うと、香織は涙声でこう言った。

「私が……、中卒だからって、おねえちゃん、バカにしてるの。いじめられて、学校行けなかった。おねえちゃんだけじゃなくて、お父さんもお母さんも、私のこと……、嫌ってるの。父親が経営してるアパートに、私、住んでるんだ。親は、私と一緒にいたくないの。お金なんてね、出してくれたって、部屋をくれたってね、私はずっと独りで、独りで今まで生きてきたの……」

途中にあったコンビニの駐車場に車を止め、香織は体を震わせ、声をあげて泣いた。ハンドルを握んで前のめりになり、丸くなった背中が悲しく震えている。ユウキは、香織を自分の境遇と重ね合わせ、香織の背中にそっと撫でた。自分の父親も僕のことを嫌っている。バイトも何もなくなった今の自分は、香織と同様で独りだ。彼女を誤解していた。ただだらしなく、楽しみだけを求めて生きているわけではない。そう見えるだけであって、底には深い心の傷があるのだ。

しばらく香織は泣いていた。ユウキは声をかけなかったものの、彼女の背中をずっと撫で続けた。

香織のアパートの駐車場に着いた。

「ここが私の住んでるところ。東浦和の駅の北側かな。実家は南側にあるの」

「僕のアパートも、ここから十分くらいだよ」

ユウキは車を降り、段ボール箱を抱えた。

香織は以前の明るさを取り戻したように、元気のよい声で言った。

「ヴィトン、シャネル、エルメス、コーチ、それから……グッチ。全部、これ、売るんだ」

そう言って、先頭に立って部屋を案内した。



「ここが、私の部屋、どうぞ」

玄関をあがり、中央の通路をまっすぐ歩くと、横に六畳ほどの部屋があった。香織のものと見える衣類がハンガーに掛けられ、並べられている。一番奥の部屋も同じくらいの広さでパソコンが置かれた丸テーブルが中央にあり、その背後には段ボールが置かれ、ビニールに被せられたブランドバッグがいくつも並んでいた。

香織はパソコンのスタートボタンを押し、ありがとうとユウキに言った。ユウキは、車から次々と段ボールを出して部屋に運んだ。香織はパソコンの前に座り、画面を凝視している。

「エルメスのバッグ、今、四十三万かぁ、結構いいかも。まだまだあがるかなぁ」

ひとまず運び終わると、香織の横に座って同じ画面を眺めた。

「あ、新品って書いてあるけど、これって新品なの？」

「え？ うん。おねえちゃんが全部新品で出せって言うてるから、そうしてるだけ」

香織は何食わぬ顔をしてそう答えた。

「……ふうん」

ユウキは、一円もくれない香織の姉はひどい奴だと思いながら、何も罪もない彼女の横顔を眺めた。窓からの太陽の光が髪にあたり、キラキラと光って見える。長い睫毛や透けるような白い肌、少しだけ高い鼻とぷっくりと膨らんだ赤みの少ない唇が美しく可愛らしくもあった。そして、香織が心の中に抱えている劣等感もいとおしく思えた。ユウキは香織の体を静かに押し倒した。拒否されることが怖かったが、彼女は何の抵抗もしなかった。ユウキは、自分の唇と彼女の唇を重ねた。しばらくして、柔らかな唇から自分の唇を静かに離し、香織の顔を見た。香織は穏やかな夢から目覚めたかのように瞼をゆっくりと開け、ユウキの顔を見つめた。先を見通せるくらいに澄んだ美しい瞳にユウキは恥ずかしくなり、すぐに目を逸らした。

\*

それからというもの、週三日ほどユウキと香織はパチンコ店に通った。二百円で当たりをひいて十連勝するときもあれば、二千円使っても一度も当たらない日もあった。いつまでも負けが続き、一発逆転を狙って四円をやり、一日に一万使ってしまうこともあった。プラスになることもあったが、マイナスになることのほうが多かった。毎回二千円香織に渡して他の台で打ってもらうというやり方だったが、二人がかりにしても当たりはとにかく少なかった。

「等価じゃなかったら、勝ち負け少しずつで、そんなダメージもなかったのになあ。前はもっと当たったのに」

五百円分のカードを持ち、換金所に歩いていく途中に香織は言った。

「なんで、当たらなくなったわけ？」

マイナス三千五百円となり、ユウキは憔悴しきった声で聞いた。

「店がいじってるんでしょ、裏で。そうとしか思えないもんね。なんだって、店が儲けられるようになってんの。それに、等価の店が増えてきて、そうしないとお客が減っちゃうから。同じ勝っても、等価じゃないと損した気分になるからね」

「で、なんで、カオリンはそんなことわかってパチンコやってるわけ？」

「あ、初めてカオリンって呼んでくれた」

香織はニコリとし、ユウキは顔を少し赤らめた。

「だって、だってさあ、何にもないんだもの。ちょっとした小遣いがほしいだけ。今日は勝てるかもしれないって、期待していくわけ。それで負けちゃって凹んで帰っても、明日になったら今日こそはって思っていくの」

「なんか、はまってるっていうより、病気みたいだね」

「そう、もう私たちは病気みたいなものよ」

「で、明日は勝てるって思ってる？」

「今は思っていないよ。でも、一晩たつと思ってるんだよね。ユウキ君だってそうでしょ？」

「え……、自信ないね、僕は。今、最悪に凹んでる。世界中で一番不幸だって思ってる」

「大げさ。ゲームに負けたと思っていればいいじゃん」

香織はケラケラと笑った。その明るさに救われ、励まされて、またパチンコ店に向かうのだろう。ユウキはそうとしか思えなくなっていた。

一ヶ月、二ヶ月はあつという間に過ぎていった。パチンコ店の騒音や、あれほど嫌っていたタバコの臭いも気にならなくなっていた。しだいに慣れ、パチンコ店に客として定着していったのだ。

全部でマイナス十二万五千円にまでなっていた。本来の目的もわからなくなり、今日当てることにだけにユウキは集中していた。当たったときの快感がこの上なく心地よく、一度も当たりがでなかったときは死んだような顔をして店を出た。香織はいつもと変わらない明るい顔をしていたが、自分の金ではないのだから当たり前か……とユウキは思い、それにたいしては怒る気にはなれなかった。なぜなら、ユウキは香織に好意を抱いていたからだった。何のとりえもない女だが、自分を相手にして話をしてくれる。真面目な話も、そうでない話も……。そして、何より可愛らしかった。

そのうち、ユウキは香織のアパートに入り浸りになり、自分のアパートを引きはらって香織の部屋に住むようになった。それを香織は拒まなかったし、むしろ好意的でもあった。ユウキの母親から口座に振り込まれる十万円を、食費やパチンコ代にあてた。香織も親からもらっているという五万円で服を買ったり、化粧品を買ったり、遊びに費やした。香織の部屋に越してきたことで、家賃や高熱費などを払わずに済んだ。ユウキにとって何もかも好都合であった。香織が湯船に浸かりながら吸うピアニッシモとかいうタバコを、自分も拝借して風呂場で吸ったりしたが、味なんてわから

なかった。ただ肺が汚れていくような気がして、半分も吸わずに湯船に落とした。相手が求めているものを自分が補ったり、削ったりすればいい。同棲なんてたいしたことはない。ユウキは、独りよがりの考えに後ろめたい気持ちを抑え、これでよかったのだと思い込むよう心がけた。

週三日だか四日だか、毎日通っているのかもわからなくなった頃、パチンコ店に向かっているときに携帯電話が鳴った。香織は、コンビニに寄るとかで隣にはいなかった。母親からだった。

「昨日の夜ね、テレビでやってたけど、親も子供のために就職セミナーとか出ないと、就職ってできないものなのかね？ お母さん、そういうセミナーに出てもいいけど」

いきなり勢いよく話し始めた。

「ユウキはまだ就職できないんでしょ？ 新卒じゃなくなって中途採用だと、もっと難しいって言ってたよ。どうする？」

「どうするって、何？ どうしようもないでしょ。できないものはできないし、就職活動なんて長丁場なんだから」そう言うと、母親は溜息をついた。

「家に帰ってくればいいじゃない。お父さんが勤めている病院じゃダメなの？ 医療事務とかでもいいし。なんか資格とるとかしないと」

「医療事務なんて女の仕事だよ。だいたい、父さんのコネなんて、僕は嫌だよ。それに、父さんと違って出来損ないの僕の世話なんか、したくないはずだよ。それとも父さんの見栄？ ああ、そんなのますます嫌だよ」

出来損ないとは、自分が医学部に落ちたことよりも、今の自分を指して言ったことだった。今の僕は、大金をパチンコ台に入れて就職活動なんてしていない、ただの道楽者だ。しかも女の家に転がり込んでいる。香織だけが自分の相手をしてくれ、社会から脱線し、底辺をさらに転がり落ちていくだけの人間。母親から送られてくる大切な生活費の金もパチンコに消えていく。そういうどうしようもない人間なのだ。

「僕なんてね、どうにもならないクズなんだよ」

「何言ってるの。頑張りなさいよ。皆ね、頑張ってるのよ。こういうときこそ頑張り時じゃないの。立派な仕事なんて就かなくていいわよ。ユウキが満足して、仕事ができればいいの」

「それが難しいんじゃないか。満足できる仕事なんてないよ」

「そうじゃなくって、自分に少しでも向いているとか得意だとか、そういう仕事でいいのよ。ねえ、アルバイトのほうはどうなってるの？ 食事はちゃんと食べてるの？」

「ああ、うん。なんとか」

ユウキはバツが悪そうに答えた。

「お米はあるの？ 送ろうか？」

「いや、いいよ。たくさんあるよ。それに、バイトも忙しくて、送ってもらっても受け取れないんだ。留守が多いから、運送業者に連絡して、実家に転送してもらおうように言ってあるんだ」

ユウキは慌てて嘘をついた。

「あら、そうなの。アルバイトのほうは順調なのね？」

「うん」

「そう。何かあったら言ってちょうだいね。就職のことでも何でも。お父さんには相談してあげるから」

「ああ、わかったよ、悪いね」

「体には気をつけなさいね。ちゃんと食べてね。冷凍食品ばかりじゃダメよ」

「うん、わかった。ありがとう」

そう言って、電話を切った。

母親の電話も疎ましく感じた。一瞬、なんとかしないとと思った。目の前はパチンコ店の入り口だ。少し立ちどまっていると、前に一度だけ見かけたことのある中年男性が声をかけてきた。

「お、香織ちゃんの彼氏かね。今日は一人かい。これから運だめしか」

「ええ、まあ」

周りからは香織の立派な彼氏と思われているのか。ユウキは少しだけ嬉しくもあり、早く今の自分を立て直さなければ

ばという危機感のようなものに襲われた。

「香織ちゃんは、今日は来ないの？」

「いえ、後から来ると思いますけど」

「あ、そうなの。香織ちゃん、可愛いからなあ。うまくいってるの？」

「え、まあ」

「あ、そうなの。へえ……」

その男性はどことなく感心げだった。

嫉妬なのか、似つかわしくないとでもいうのか。ユウキは不快を露わにした。

「なんです？ 僕に文句でもあるんですか？」

「いやあ、いやあ、何もない、何もない、ま、中入るんだろ？」

男性は、ユウキの肩をポンと叩いて足早に行ってしまった。

ユウキはもやもやした気持ちを引きずりながら、店内に足を踏み入れた。その日にかぎって、こめかみのあたりがズキズキとした。騒音のせいだろうか。それでも、一円パチンコのコーナーに行き、両隣が誰もいない台の前に座ると、すかさず財布を開けた。

ユウキと香織は、市内とショッピングセンターへ行くことがあった。週に一、二回、互いに手を繋いで店内を歩いた。さまざまな店が並び、インテリア雑貨や服や靴、時計や下着……。美容院から歯医者まで何から何まで揃っている。

「そのスカート似合ってるよ」

珍しくスカートを穿いている香織を、ユウキは少し誇らしげに言った。

「これは、この前買ったやつだよ。一度も穿かないとゴミになっちゃうからね」

「いくら？」

「三千五百円」

香織は、紺色の生地に白く小さな花柄が散りばめられたスカートを自分で眺め、右手で生地の上を丁寧に一度撫でた。

「似合ってるよ。毎日スカート穿けばいいよ」

「え、いやだ。スカートってなんか苦手。私って、ジャージのほうが似合うじゃん」

香織は笑った。

「ジャージなんか似合わないよ」

ユウキは真面目にそう言ったが、香織は真剣に聞いていないのかただ笑っているだけだった。

二人は何を買うわけもなく、店内をゆっくり眺め、歩いた。

「たくさんあって、どれもこれも欲しいけど、だからってなかなか買えないね」

香織は、ランプの形をしたライトスタンドに触れながら言った。

「買えばいいよ。僕が買ってやるよ」

ユウキはそう言って、ライトの部分に貼り付けてある値段を見た。

「六万。こりゃ、無理だよ」

「ねえ、ほら」

香織はケラケラと笑った。本当に欲しいようには見えなかった。香織が好きなものや、何が一番興味があるのか、ユウキはまだわからずにいた。今わかるのは、パチンコが好きだというだけだ。服を買っても、普段はジャージのズボンばかりで、歳相応にお洒落をするということはあまりなかった。それでも香織は、ユウキとセックスをすることはあった。週一回くらいではあったが、ユウキはコンドームをつけて行為におよび、香織をへたに傷つけることはなかった。ユウキから見ると、香織は欲求を満たすためであって、それ以上に自分を想っていないのではないかと思うときがあった。しかし、それは行為の後の冷めたときに一瞬疑問に思うだけであり、実際のところはよくわからずにいた。

\*

ユウキはいつものパチンコ店に入って打っていた。二千元使っても三千元使っても当たる様子がなく、あきらめて店を出てハンバーガーショップに向かった。途中で携帯に香織から連絡が入り、居場所を告げると、すぐにユウキがいる二階にやってきた。

「負けちゃったの？」

「ああ」

「負けると、いつもハンバーガーになっちゃうね」

「あの金で、もっといい飯食えたかなって思ったりする。ついついせこくなっちゃうな」

二人は窓際の席に座り、ハンバーガーを口に運んだ。

「おいしく感じられない。勝ったときはおいしいと思うけど、負けるとダメだな」

「そう？ ただ飽きただけかもよ」

香織はそう言ったきり、黙って窓の外を眺めた。すると、どこかから救急車のサイレンが鳴り、近づいてきた。そう思ったと思うと、パチンコ店の前で停まり、入口から店員が出てきて救急隊員に向かって何か言っている。

「え、なに？」

香織は立ちあがって、下を見おろした。

救急隊員が担架を運んだと思うと、客が店から出てきて何やら騒いでいる。

「ええ、何なの？」

香織はすぐに下に降りていってしまった。

担架に男性らしき人が横たわっていて、救急車に向かって運ばれているのが見える。体調でも崩したのだろうかユウキは思った。あんな騒音では具合が悪くなる人もいて当然だろうと思いつつ、ハンバーガーをゆっくりと噛みしめながら下を見つめていた。

「ねえ、聞いて！」

香織が飛び込んできた。

「首吊ったんだって。トイレで。若い男の人で、借金があって、それで死のうとしたんじゃないかって、おじさんが言ってた」

「で、助かったの？」

ユウキは香織の顔を見上げた。

「ダメみたい。心臓マッサージしてもダメだって言ってたから」

そうこうしているうちに、救急車はまたサイレンを鳴らしてその場を去っていった。

「不吉。いやあ、そんなことあるなんて。最悪じゃん」

香織は椅子に座り、苛ついたように右手の人差指の爪を齧った。

パチンコ店の前では、いつものように落ち着いて誰もいなくなった。ユウキがオレンジジュースを啜っていると、店員が青いバケツから白いものを手に取り、店の周りに撒いている。

「何だろ……」

「……塩でしょ」

香織は呟いた。

その後、自殺現場となったクィーングリーンに、ユウキは行こうとしなかった。そのこと自体が異様に思えてならなかった。借金をしながらもパチンコに打ち込んで自殺をしてしまう。香織には、今は勝ちどきだと散々言われたが、そんな場所に行く気は起きなかった。

香織もまた行かなかった。ユウキは、このままパチンコを辞めることが一番よいことだと思った。

「今、やめなくっちゃ。カオリンのためにもね」

「私のため？」

香織はパソコンを見つめていた。その横にユウキは寝そべり、昼間から、二人で部屋の中に閉じこもっていた。夏の真っ盛りで、家から出るのは夕方くらいだった。

「そう。僕が仕事を見つければ、カオリンも親から自立できるさ」

「パチンコ屋であんなことあったから、変に思ってるの？」

「ああ。やっぱり、嫌だよ。自殺するなんてさ。あの店のトイレ、行きたくないよ」

「なによ、借金したり、パチンコしたり、全部、自分の責任じゃない。誰のせいでもないじゃん。自己責任ってもんじゃない。自殺だって、誰のせいでもない、自分の責任なんだから」

香織はムキになった。

「そうだね、自分の責任……かもね。僕は、医学部には受からなかったしね、それも自分の責任だよね」

「医学部？」

「父さんは医者やってて、僕を医者にさせたかったんだ。だけど、僕は出来が悪くってさあ。大学受からなかったしね。適当な大学行って、就職もままならない」

「へえ。初耳……」

「父さんは立派に医者やってる。それに、父さんは、自分の立場に満足してる。何も不自由ないよ」

「ふうん……。ユウキ君って、おぼっちゃんなんだ」

香織はユウキをバカにするわけでもなく、淡々と答えた。

「おぼっちゃんなんかじゃないよ」

ユウキは頭にきて否定した。

「だって、医者になるまでお金かかるもんね。で、お金がなくなっちゃ医者になれないじゃん」

「ああ、どっちもどっちだな。でも、僕とは関係ない」

香織は無反応のまま、パソコンを見つめていた。ニュース欄を見ているのか、オークションを見ているのか、ユウキにはわからなかった。

パチンコをやらなくなってから、二人は毎夜抱きあった。パチンコで当たった瞬間の快樂は、セックスの快樂にも似ていた。パチンコは感覚ではなく、現実で達成した快感。今は、そんな現実の刺激はなくなっていた。パチンコで満たせなくなったストレスをセックスで解消するかのようになり、互いに積極的であった。ユウキはそんなとき、自分だけに向かい合ってくれる香織がいとおしくてならなかった。セックスという行為が愛という形の一部と信じた。

「僕のこと、愛している？」

と、ユウキは行為の後、必ず聞いた。

「うん、愛してる」

香織は迷いなく答えた。

ユウキは本当にそうなのだと思う。自分は愛されている。そして、香織のことも僕は心から愛している。互いに会話が成立し、拒まれないセックスというのは、自分を否定されないということ。それが何よりも満たされるという状態に近かった。

\*

夕方、コンビニに行き、求人雑誌を買った。毎週買っているが、思うように事は進まなかった。毎回、眺めて考えては一週間が過ぎてしまう。ユウキはそんな自分に焦りを感じながらも、情報収集には余念がなかった。

コンビニから部屋に戻ると、

「五千円勝ったよ、すごいでしょ。残りは、お菓子とカップ麺で交換。後で食べようよ」

香織がユウキの目の前に突然現れてそう言い、首を傾げてにっこりと笑った。

「もうやらないんじゃないの？」

ユウキは驚きながらも冷静に言った。

「私、そんなこと言ってないよ。やりたくないのはユウキ君だけじゃなかったっけ？」

「え……。まさか、あの店で？」

「うん。いいじゃん、勝ったんだし」

香織が、スナック菓子とカップ麺をテーブルの上に置いて立ち上がった瞬間、黒のショートパンツから黄色く丸いものが転がった。

「ああ！」

香織は声をあげ、つかさず拾った。

「この中に八百円入ってる。ああ、忘れたあ。やばい。ねえ、店に行って、お金に換えてきてくれる？」

ユウキの手のひらに、そのコインを無理矢理握らせた。

「車、おねえちゃんのところに置いてきたから、電車で、ね。お願い」

香織は頭を下げてそう頼み、ユウキは嫌々ながらも家を出た。

このプラスチックの黄色いコインの中に、八百円分が入っている。台に千円投資し、二百円使ったからその残りの金。これを金に変えてこなかったことより、香織がパチンコをやったことがショックだった。東浦和の駅に着き、連絡がよく電車に乗り込んだ。南浦和での乗り換えも忘れそうになるくらい、放心状態だった。香織がパチンコをやったこと。そして、またあのパチンコ店に行くこと。重苦しい憂鬱感に襲われていた。

駅に着き、早足でクィーングリーンに向かった。黄色のコインを握りしめ、早く早くと焦った。店に着くなり、コインを入れる機械のところまで走っていき、すぐに八百円に換えてその金を握った。そのまま店を出て二、三步出たとき、誰かの声が聞こえた。

「ちょっと、待ってくれよ」

店内の騒々しい音がまだ耳にこびりつき、空耳かと思って歩きだそうとすると、また呼びとめる声が聞こえた。

「おい、ちょっと、ちょっと」

ユウキは立ちどまった。細身で茶色い短髪の、自分と同じ歳くらいに思える男が、ユウキに元に走ってきた。何か気分を害するような行動でもとったのだろうか、ユウキは不安になりながらも、相手の顔をじっと見た。

「たぶん、だけど、民野香織って女とつき合っていない？」

「え、ああ。つき合ってますけど」

ユウキはきょとんとし、もしかして香織に好意を寄せている男かもしれないと思った。

「あの民野香織ってのと、つき合うのやめたほうがいいよ。前、つき合ってた奴は俺のバイト仲間だったけどね、そいつは自殺したんだ。この前、ここのパチンコ屋のトイレでさ。首を吊ったんだ。あの女のせいだよ。俺はそう思ってる」

そして、その男は冷静な口調で続けた。

「そいつは白井っていうんだけど、一年くらい前かな、たまたま日曜にこのパチンコ屋に行ったら、民野香織って女が声かけてきたんだ。白井は一目惚れして、すぐつき合うようになって。俺はやめたほうがいいって言ったんだよ、可愛い

けど、変なノリだったし。白井はもてる奴じゃなかったから、その気になってさ。で、パチンコ屋ばかり来て、二人で打ってたらしいよ。そのうち負け額が大きくなって、あの女が借りられるところがあるからって紹介したらしいんだけど、白井はバカだからさ、その借りたところが闇金だったんだ。それで、バイトしても金が全然たまわなくて。あいつは真面目だったからな、いわゆるパチンコ依存症になってた。いつもパチンコの話して、プレミアム演出がどうか、そんなことばかりでね。もともと痩せてたけど、十キロくらい痩せてガリガリだった。それでもバイトが終わったらパチンコしてたよ。何度もやめるよう言ったけれどね、ダメだった。十万くらいの借金が五百万くらいに膨れ上がったって言うし、それをパチンコで返そうと本気で思った。ほんとにバカだよな。民野香織って、おそろしい女だよ」

ユウキは、あのとき、ハンバーガーショップの二階で見下ろしていたのを思い出した。香織はすぐに下に行って様子を見に行き、借金苦で自殺をしたらしいと自分に告げた。その裏に、香織自身が絡んでいたというのか。香織は他人事のような顔しかしていなかったが、あれは嘘だったのだろうか。一体、どちらを信じてよいのかわからなかった。

「その男と彼女が、本当につき合ってたんですか？ 証拠なんてないじゃないですか」

ユウキは信じられなかった。もしかして、この男は、たんに香織と僕を別れさせたいだけではないのか。

「ああ、プリクラがあったかもしれない。はじめに三人で一度撮ったな……」

その男はズボンのポケットから財布を取り出し、小銭入れのチャックを開けて中を掻き回した。

「ああ、あった。これこれ」

五百円玉くらいの大きさのポロポロになったプリクラを見せた。たしかに三人映っている。よくみると、そのうちの右端の一人が目の中の男だった。中央に、髪の長い女が映っているが、折り目がついてぼやけてしまっている。香織のようにもそうでないようにも見えた。

「これじゃ、わからないですよ。彼女かどうかは判断できない……」

「いや、これが民野香織だよ。あの女ですって」

「……もし、そうだとすると、その白井っての人が自殺したり、借金したり、依存症になったり。それって全部自分の責任ですよ。だいたい、それにつき合ってた人のせいにしたり、しかも僕の彼女のせいにするなんて、ひどくないですか」

ユウキは怒りに似た感情が湧きあがってきた。香織がこの前言っていた自己責任という意味は正義に溢れ、この男は責任を誰かに擦り付けているだけに思えた。今聞いた話の内容は嘘で、全てにおいて間違っている。それに、何もかも、僕にたいするでっちあげでしかない。

「誘導していったのは、あの女なのさ。白井は俺とパチンコやった日曜が、人生初めてのパチンコだったんだ。あの日は一ヶ月のバイト代全部使ってしまって、もう二度とやらないと話してたんだ。パチンコに依存させたのも、闇金に借金させたのも、あの女のせいだ。ろくな女じゃねえよ」

「だいたい、その女は彼女じゃないだろっ」

ユウキは、プリクラをその男の手から払い落とした。

「あんたも、ハマってるなあ。俺、もう知らんよ。せっかく親切に言ってやってるのになあ」

呆れたようにそう言うと、ユウキの元を去っていった。

つまらない因縁をつけてくる人間もいるものだ。ユウキは不愉快でたまらなかった。しかし、なぜ、こんなことを言うのだろうか。香織は危ういところもあるが、本当はか弱く、自分にコンプレックスを抱えているだけなのだ。それに、昨夜も、僕のことを愛していると言ってくれた。あの澄んだ目が嘘をついているとは思えない。でも、もし、あの男が言っていることが本当だとしたら……。

ユウキは足元に落ちているプリクラを拾い上げ、中央に映っている女を見つめた。やはり、香織のようでもあり、そうでないようにも見えた。共通点は茶色の長い髪くらいで、目元も口元もぼやけてよくは見えなかった。

帰りの電車で揺られていると、携帯が鳴った。マナーモードにしていなかったせいで車内の客から注目され、慌てて切ったが、またすぐにかかってきた。すぐに電源を切り、乗り換えようとホームに降りたときに携帯のボタンを押すと、またかかってきた。母親からだった。ユウキは、あの男が言ったことが引かかって苛立ちが隠せなかったが、しづしづと携帯を耳にあてた。

「ユウキ、何度もかけてるのに出ないで。総合福祉アカデミーってとこに通うんだってね。ヘルパーの資格とるって。お



母さんちょっと安心したんだよ。で、その資格とるには二百万円もかかるの？ 今日、銀行の窓口に行って振り込んでもらったんだけどね。なんだか、タミノカオリって人の個人の口座みたいだったけど、言われた通りに振り込んでおいたんだけどねえ。まあ、お金の心配はいらないけど、間違っただのかと思ってね」

ユウキは息を呑んだ。自分はヘルパーの資格をとる予定もなければ、そんな大金を実家に要求するわけもなかった。

「タミノカオリって……」

と言って宙を見つめた。

「総合福祉アカデミーとかいうところの事務員さんから電話があってね、授業料を納めておりませんって。至急振り込んでくださいっていうから、その通りに振り込んだんだけど、なんかまずかったかしらね」

ユウキの耳元で母親の声だけが大きく響いた。嘘だろうと思った。

「タミノカオリって、本当に言ったの？」

「いや、女の若い感じの人の声で、総合福祉アカデミーの事務員をしていますって丁寧に説明してくれたよ。その人の名前は知らないけど、振り込み先がタミノカオリだったからね。学長さんの名前かと思ったけどね。それにしても、随分、お金かかるんだなあと思って。一度、ユウキに確認してからのほうがよかったかしらねえ。で、それでよかったのかい？」

しばらく沈黙の後、ユウキは、

「……いや、まあ。悪かったね、お母さん」

と丁寧に言い、がんばりなさいと言う母の言葉を最後まで聞かずに電話を切った。

母親が嘘をついているはずもなく、香織は僕の实家から金をとっていったのだ。実家の電話番号はこの携帯から調べたのだろう。そんなことをするとは微塵も思わなかった。しかも学校の事務員を装い、二百万円も要求した。香織にたいして、信用する気持ちはすっかり失せていた。自殺した男は香織と以前本当に付き合っていて、おかしな金融会社に金を借りさせ、借金苦に陥れた。最後は自殺をし、それすら香織は何食わぬ顔をしていたのだ。本当にそうなのだ。香織にたいする愛は一瞬にして消えた。自分は香織のどこに好意を抱き、何を愛だと勘違いしていたのだろう。言葉だろうか、それとも、セックスだろうか……。ユウキは、もう何も信じられなくなっていた。

ホームに立ち尽くしたまま、母親にもう一度電話をした。

「あ、母さん？ そういう電話があったときは、僕に必ず連絡してくれる？ 詐欺だったら困るからさ」

「ええ、詐欺？ 福祉の学校のは詐欺だったのかい？」

「いやあ、ちがうよ……」

「そう。それならいいけどね」

ユウキは本当のことが言えなかった。ヘルパーの資格をとることを否定すれば、母親ががっかりするだろうと思ったからだ。失望させるような生活と現実。胸を張って言えることなど何ひとつなかった。

ユウキは早足で駅を出て、コンビニを探した。そして、すぐに見つけると入り口まで走った。ATMの前まで行き、財布からカードを取り出した。香織が自分の銀行口座の金まで取ったのではないかと、急に不安になったのだ。しかし、金がおろされてはいなかった。ユウキは安堵し、重い足取りで駅に戻っていった。

東浦和の駅に着き、ユウキは香織のアパートのほうへ歩きながら、あんな女のいるところにいたら自分が殺されると思った。可愛い顔をしていながら、恐ろしい女だ。このままだら、自分はその自殺した男のようになってしまいかもしれない。

「あの部屋から出ないと……」

そう呟き、焦りと恐怖で胸がざわついた。

アパートに着き、恐る恐るドアを開けたが、部屋には香織の姿はなかった。鍵もかかかっていなかった。相変わらず段ボール箱とブランドバッグが置いてあり、パソコンを見ると、休止状態のようでスタートボタンが青く点滅していた。

ユウキはもうひと部屋に行き、ここに越してきたときに持ってきたキャスター付きのスーツケースを引きずり、散らかっている自分の衣服やひげ剃りや歯ブラシなどのこまごまとした小物を乱暴に詰め始めた。早くしないと、あの女が帰ってきてしまう。焦れば焦るほど、手が震えた。なんとかひと通り詰め終わってスーツケースの引きずりながら、ムシャ

クシャしてブランドバッグを片っ端から蹴飛ばした。

「バカ野郎！」

すると、一番奥に置いてあった、ビニールに包まれていないヴィトンのバッグが逆さまになり、千円札が何枚かはみ出しているのにユウキは気づいた。不思議に思い、バッグを手にとって中を見ると、たくさんの千円札が無造作に詰め込まれていた。何枚あるかはわからなかったが、そんな数の多さに驚きながらもすぐに気づいた。これは、パチンコを打ちに行ったとき香織に与えていた千円札ではないだろうか。毎回二千円ずつ。それをこんなところに入れて隠していたのか。

「あの女！」

ユウキはそのままバッグごと持ち、急いで香織の部屋を出た。この先行くあてもなかったが、逃げるようにアパートから離れていった。

\*

行くあてがなかった。高崎の実家に帰るにも、ますます帰れない状況になっていた。ユウキは何も考えず東浦和の駅に行き、ちょうど着いた電車で飛び乗った。高校名の書かれたジャージを着た男子学生が、ビニール製の大きなバッグを持って雑談をしている。端に立て掛けた大きな灰色のスーツケースに、肩に掛けたブランドバッグ。そのバッグには千円札が山ほど入っている。そんなこと誰も知るはずもなく、自分の立場と笑顔が耐えない学生達を比べ、無償に虚しく悲しくなった。最近では、電車に乗るといつもそんな気分に駆られていた。比べてもどうにもならないと知っていながら、比べてしまう。電車に乗り合わせたどこの誰かも知れない人達が、自分とは違う世界にいるような気がしてならなかった。

。

駅に着くと、突然、アナウンスが流れた。

「緊急停止ボタンが押されたため、確認作業を行います。しばらくお待ちください」

なかなか動き出さないため、ユウキはそのまま電車を降りた。南浦和駅だった。スーツケースはともかく、このブランドバッグが邪魔だった。駅のトイレに入り、バッグから千円札をスーツケースの中に詰め込んだ。掴み取った千円札のあまり多さに、こんなにもあの女に渡していたのかと驚いた。トイレを出たものの、まだ電車は停車したままだった。仕方なく駅を出た。スーツケースを引きずりながら歩き、駅の周辺を歩いた。やたらとパチンコ店が目についた。毎日毎日、ここで孤独な人達が勝ったり負けたりして、すってしまった金を悔やんだりしているのだろう。ユウキは、一瞬、バッグに入っていた千円札を使ってパチンコをやろうかと頭を過った。しかし、香織にだまされてきたことに打ちひしがれ、今ひとつ気持ちが乗らなかった。狭い路地を曲がると、リサイクルショップがあり、ユウキは立ちどまった。

「このバッグ、売ってやるか」

ひとつ溜息をついてから、店に入った。

店員は丁寧にいらっしゃいませと言い、

「買い取りですね。こちらにお座りください」

と促した。

「ああ、このバッグです。タグがついてないですけど、新品に近いと思います。高く買ってくださいよ」

「じゃ、ちょっと見せていただきますね」

若い男性店員はバッグを手に取り、あちこちを丁寧に調べ始めた。虫眼鏡を取り出し、バッグの内側までじっくりと見ている。

ユウキはこれでいくらくらいになるのだろうと思った。ブランドバッグがどの程度の値段なのかわからなかった。しかし、香織がオークションで売るくらいの値段がつくのだろうと思っていた。

「お客様、残念ですが、こちらは正規品ではないようですので、お値段がつけられません」

店員はユウキの顔をじっと見て、丁寧に答えた。

「えっ、正規品じゃないって、偽物ってことですか？」

「はい。どこで購入されたんですか？」

「ええ、知り合いからの頂きものだったんですけど……」

「そうですか。偽物はよく出回ってますからね」

ユウキは偽物だと聞いて、香織が憎らしくてたまらなかった。何も知らずに嘘に嘘を重ね、恥ずかしいとさえ思った。

「そのバッグはいらないので……」

ユウキはそう言って立ち上がり、すぐに店を出た。偽物のバッグではあったものの、これ以上そんなバッグを持ち歩きたくはなかった。

ユウキは腹が無償に減るのを感じ、向かい合いのファーストフードの店に入った。ホットドッグとアイスコーヒーを

頼み、喫煙室に入った。あの部屋から拝借したはずのピアニッシモというタバコを探した。ズボンのポケットに一本だけ入っているのをやっと見つけ、パチンコの景品でもらったライターも探したが、スーツケースの奥を掻き回しても見つからなかった。すると、隣に座っていた男性が、

「これ、あげますよ」

と言って、ライターをテーブルに置いた。

「ありがとうございます」

と言ってライターを見ると、パチンコの景品の動物ストーリーの文字と動物のイラストが入っている。この人はパチンコやってきたのかと思いながら、タバコに火をつけ、溜息の混じった煙を外の景色に向かってゆっくりと吐いた。

あっという間に夕方になった。五時過ぎてもまだ明るかったが、十月にもなると肌寒かった。ファーストフードの店で時間をぐずぐずと潰した後、駅近くのドーナツショップに入った。一番奥の席に座り、アイ스티ーを少しずつ飲んだ。金はまだまだあった。ブランドバッグに入っていたたくさんの千円札。自分がパチンコに行った数だけは入っている。今までどれだけ使い込んだのかと思うと、恐ろしくもあった。

「まともに働いていれば、毎月毎月金は入ってくるのに。バイトだってさ。ああ、なんてバカなことしてたんだろう……」

ユウキは一人呟き、自分がしてきたことを悔いた。そして、その反面、金が一瞬にして手に入る誘惑に心が揺れていた。すぐそこにパチンコ店がある。千円だけやってみようか。もし当たったら、今まで使った金が少しでも清算できる。今まで果たしてどれくらい使ったのか。十万以上といったものではないような気がした。二十万？ それともそれ以上か。あの女に与えた金は？ 収集がつかなくなっていた。

ユウキはスーツケースの奥から千円札を引っ張りだし、握りしめた。やるべきか、やらないべきか。この千円札を台に入れれば、もう戻ってこないかもしれない。それとも、倍以上になって戻ってくるだろうか。千円札をじっと見つめ、こうして自問自答する自分が不思議でならなかった。

「たかが、パチンコじゃないか」

溜息混じりに言い、店に向かうことはやめた。

その夜、すぐ近くのネット喫茶に泊まった。シャワーを浴び、パソコンやテレビを見て、疲れ果てて眠り、早朝ネット喫茶を出た。どこに行く所もなく、駅のほうを呆然と見ると、スーツ姿の男女が足早に歩いている。こうして、人は忙しく仕事に向かっている。

ユウキは、そのまま反対方向に歩きだした。自分が住む部屋を借りなくては何も始まらない。そう思いながら、腹が空くを感じてコンビニに足を向けた。

ユウキは人けのない路地を曲がり、駅から遠ざかった。どちらの方角へ向かっているのか、どれくらい歩いているのかわからなかった。歩くたびにスーツケースがカタカタと音をたてて、ユウキに引きずられていく。まるで遠くに旅行へ出かけてその帰路のように、端からはユウキの姿は軽快にさえ見てとれた。

そうこう歩いているうちに、一件の小さな不動産屋を見つけた。あまり人通りの盛んでない場所のせいか、家賃も高くない比較的よい物件があるように思えた。窓のところに貼り付けてある物件には目に通さず、ユウキはとりあえず中に入った。店内は年季の入った木造の暗い外装とは違い、白い壁紙に白い大きな蛍光灯が下げられ、明るく都会的にさえ思えた。

まだ三十代くらいに見えるスーツ姿の男性がユウキの存在に気づき、

「どうぞ、そちらにお掛けください」

と声を掛けた。

ユウキはひとつしかない椅子に座り、その背後にスーツケースを置いた。

「このあたりをお探しですか？」

その男性はユウキの前に座り、横に置いてあったパソコンのスイッチを入れた。

「はい。このへんはいくらくらいになりますか？ 家賃、一番安いのは、どのくらいです？」

「ええ、そうですね。あ、すいませんね。パソコンの起動が遅くて。お客さん、旅行の帰りですか？」

大きなスーツケースに目をつけた男性が、軽く聞いた。

「いえ、ちょっと。住む部屋を探してまして」

「え、じゃ、今はどこにお住まいになられているんですか？ 学生さんでしょうか？」

男性は鋭く質問を続けた。

「もしかして、今、仕事されてませんか？」

「……はい」

「じゃ、無職ってことですか？」

「……はい」

「申し訳ございませんが、無職の方にはご紹介できないんですよ。申し訳ありませんが」

そう言うとき男性は席を立ち、早く帰れとばかりに頭を軽く下げて奥へさっさと行ってしまった。

ユウキは仕方なく立ち上がり、店を出た。何もかも投げ出された気分だった。怒ることもできなかった。虚脱感に全身が襲われ、目先のことすらどうしていいのかわからなくなっていた。悲しいのか虚しいのかもわからず、ただ次から次へと路地を曲がっていった。

気づくと、南浦和の駅前に来ていた。

ちょうど昼になり、昨日のドーナツショップに立ち寄った。何度も注文をして時間を潰し、夜になるとネット喫茶に泊まった。

そんな生活を、数週間が過ぎた。体重こそわからなかったが、頬がこけて鏡を見るとやつれて見えた。十分な栄養の採れない食事とネット喫茶の個室とシャワーでの生活は、徐々にユウキの心を蝕んでいった。ソファでの浅い眠りの中で、パチンコのリーチの映像が次から次へと鮮明に頭の中に映り、大声をあげて起きあがったときもあった。額にはびっしょりと汗をかいていた。そんなとき、

「うるさい！」

「黙れ！」

と、それぞれの個室から声があがった。

ユウキは、何かに心が侵されているような恐怖があった。それが一体何なのかわからなかった。安心も安定もないこの生活が、自分をどこか違う世界に陥れているかに思えた。香織の部屋に何も知らぬ顔をして戻れば、また自堕落な生活を送ることもできるだろう。しかし、もう戻る気持ちはなかった。香織をもう愛してはいなかったし、香織は自分を愛してなどいなかったからだ。人を騙してまで金だけを求めている香織にたいして、愛という形など存在するわけもなかった。ユウキはふと思った。あのとき、なぜ警察に訴えなかったのだろうか。立派な詐欺ではないか。それに関わることが怖かったのか。面倒だったのか。それとも、母親に全てがバレるのが嫌だったのか。どれも当てはまる気がした。自分は愚かだと思つづく思った。

ユウキはスーツケースから千円札を全部出し、くしゃくしゃになった札を丁寧に伸ばしながら、数え始めた。全部で百三十四枚。それらを綺麗に揃えて輪ゴムで束ね、個室に置いてあったアンケート用紙で包み、またその上から輪ゴムを掛けた。そして、またスーツケースの奥に仕舞った。

ソファに横になって体を丸めた。このまま朝が来なければいい。このまま目覚めなければいい。そんな気持ちで埋め尽くされながらも、ユウキは浅い眠りに入っていった。

\*

午前中、スーツケースを引きずりながら、今度は駅の反対方向に向かって歩いていった。何の予定もなかった。足どりは重く、不動産屋の前で立ちどまってはまた歩き始めた。無理を言えば、部屋を貸してくれるかもしれないが、自分の立場に過剰にも後ろめたく思っていた。

ユウキは元々、ずうずうしさを持ち合わせていなかった。世間を憎んだとしても、それ以上、自分自身のネガティブな部分を憎んでいた。この世の中には人を蹴落としても這いあがろうとする人間は山といるのに、ユウキはそれができなかった。自分を蹴落とす人間はいても、それにたいして強く出ることは出来なかった。

ユウキが中学生のとき、担任の教師に自分の長所と短所を答えるよう言われ、

「僕の長所は真面目なところですよ」

と言ったが、

「真面目というのは、長所でも短所でもあって、これといった個性のないってことだね。もっと、自分のことを考えるように」

と言われたことがあった。それをまともに受けて、自分にたいして悩んだこともあったが、いまだにこれといった長所も短所もなく、真面目な性格と思い込んでいた。ユウキはこうして放浪するかのように歩きながら、過去の出来事を思い出し、自分は何の個性もないつまらない人間だと確信を抱くようになった。

スーツケースを持ち上げながら階段を一段一段上り、歩道橋を歩いた。下は道路があり、車が凄まじい速さで走っている。橋の真ん中まで歩いて立ちどまり、下をじっと見つめた。

「……ここから落ちたら、何もなくなるだろうな」

涙が込み上げてきた。

「何のために……、何しに……生まれてきたんだ……」

頬をつたう涙を左手で拭い、そのうちしゃくりあげ、嗚咽が漏れた。

「もう、嫌だ……。何もかも、僕って、もう、もう……。疲れた……」

そう言って、スーツケースにもたれるようにその場にうずくまった。子供みたいに声をあげて泣いたが、車の音がすべてを掻き消していく。

そんなとき、ズボンのポケットから、携帯がブルブルと震えた。ユウキは無造作に右手で携帯を取り、わけもわからずボタンを押した。頭を下に向けたまま携帯を見たが、涙で歪んで発信者がわからなかった。ユウキは黙ったまま携帯を耳にあてた。

「ユウキ、ユウキ、もしもし？ 資格とったらこっちで働くの？ ねえ、資格とるのに、どれくらいの期間かかるのかしらねえ」

母親だった。ユウキは声が出なかった。ヘルパーの資格なんて全て嘘だ。その費用も……。

「ユウキ、聞いているの？ ねえ、それからね……」

ユウキはそのまま電話を切った。

母親に何も話すことがない。アルバイトもしていない。部屋もない。資格もとるわけでもなく、何もなくなった自分。金を騙し取ったあの女のことも、全て……。

どうしようもなく、携帯の電源を切った。

しばらくして立ち上がり、歩き始めた。歩道橋をおり、そのまま西のほうへ歩いていった。百メートルくらい歩くと、商店街の中に入った。さっき泣いたせいか妙に腹が減り、何かを食べたくなった。

一件の小さな弁当屋を見つけ、ユウキは立ちどまった。店頭には十個にも満たない弁当が置かれ、黄色い紙に四百円と手書きで書かれている。店の奥はガラス張りによく見えず、客は誰もいなかった。ユウキは弁当に目がいったわけでは

なく、窓ガラスに貼ってあるはり紙だった。

『アルバイト募集中 時給八百円 住み込み可』

筆で書かれたような太い勢いのある字だった。しばらく突っ立っていると、ガラス窓がガラリと開き、店の中から五十代くらいの店主と思われる男が声を掛けてきた。

「バイトかね？ うちの奥さんが病気で入院しちゃってね。俺一人じゃ手が回らなくてね。困ってるんだよ」

ユウキはつかさず聞いた。

「住み込みって書いてありますけど、住み込みできるんですか？」

「うん。二階が空いてるからね。息子が、東京に住んでるからさ。部屋は空いているし、今日からでもどうだね」

「よろしくお願いします」

ユウキは頭をさげた。

店主の言う通りに、狭い木造の階段をのぼって二階にあがった。六畳ほどの広さの畳の部屋だった。

「息子が使ってた机だけどさ。ここは自由に使ってくれていいから。そうそう、名前は何さん？」

店主は、木造の古い机に軽く触れた。机の上には辞書や参考書、電気スタンドが置いてあった。

ユウキはスーツケースから履歴書があったかどうか探したが、どうしても見つからない。

「え、何かね、免許証？ いや、この紙に書いてくれればいいから」

そう言い、机の引き出しからメモ帳と鉛筆を出した。

「あ、履歴書は必要じゃないんですか？」

「いやあ、いらない。そんな仰々しいもん、いらんよ」

それを聞いて、ユウキは紙に自分の名前を書いてその店主に渡した。

「時田ユウキ君ね、わかった。何歳？」

「二十三歳です」

「そうっか、若いねえ。俺は瀬名太一。店の看板に書いてあったろう？ 瀬名弁当って。とにかく人手不足なんでね、お願いしますよ。若い子が来たりするけど、すぐやめちゃうんでね。こういうこじんまりした店は人気ないからねえ。で、この部屋は好きに使っていいからね。押入れに布団が入ってるしね。トイレは階段下りたところにあるし、風呂はトイレの横ね。ここからの景色は悪いけど、我慢してな。息子は東京の会社に勤めるからって出てっちゃったよ。弁当屋は嫌みたいでねえ」

窓のほうを見ると、前の家の壁しか見えなかった。ユウキはそのまま店主に連れられ、調理場へ行き、手をよく洗うことと割烹着を着ること、調理の手順や盛りつけ方法などを教わった。

「まず、その髪、切ってこないとね。こういう小さなとこだと、衛生に気をつけないとダメでね。髪の毛なんか入ってたりすると店が潰れちゃうから」

店主はそう言って笑った。

「向かい側に千円カットの店があるから、これから行ってきてくださいな」

ユウキは、早速カットしに出かけた。とくに前髪が耳に掛けられるくらい伸びきってしまった。髪を洗うのも面倒だったため、思い切って坊主にしてもらった。そうしてすぐに帰ると、その潔さに店主はさらにユウキを歓迎してくれた。これでよかったのだろうかと思いつつも、あのネット喫茶での生活から脱出できたことに安堵し、これからは毎日の暇がなくなるのだと思うと嬉しかった。

一夜明け、早朝五時になると、瀬名はユウキの布団を剥いだ。

「仕事だぞ。早く起きなさい。今日は五時だけど、明日からは四時起きだぞ」

ユウキはぼんやりと目を覚ましたが、眠くて起きあがれずにいた。

「ほら、起きて。仕事だぞ」

白い割烹姿の瀬名はそう言うと、階段を下りて行ってしまった。

ユウキは重い腰をあげ、布団から這いだし、昨夜スーツケースから出しておいたまだ一度も着ていない黒いTシャツを着て、ジーンズを穿いた。まだ目がはっきりと覚めずにのろのろしていると、下から、

「おーい、早く来なさい」

と声が掛かった。

ユウキは慌てて階段を下り、洗面台で手をよく洗って壁に掛けられている割烹着を着、調理場にいる瀬名のところへ行った。

「おはようございます」

「おはよう。そのズボンじゃ、動きづらくないかね。手はよく洗ったか？」

「あ、はい」

ユウキは緊張した面もちで返事をした。

瀬名は油の中に鶏肉を入れ、揚げている最中だった。

「まあ、いい。着替えてる時間ないしな。とにかく手伝ってもらわないと。今日はね、盛りつけと、そうだな、先にポテトサラダを作ってもらおうか。作ったことある？」

「いえ……」

「そか、もうジャガイモとニンジンも切って置いといたから、それ茹でて。それから冷蔵庫にあるキュウリを薄くスライスして塩もみしておいておく、タマネギもスライスしてな。茹であがったら、でっかいボールに入れて、ジャガイモをあそこにあるすりこぎで潰して、泡立て器で他の具とよく混ぜる。マヨネーズ入れて、塩こしょうする。ああ、ハムを切って入れないとね」

ユウキは一度に呑み込めなかったが、とりあえず、テーブルの上のまな板に乗っている四分分されたジャガイモと細かく切られたニンジンを、ガスコンロに置いてある鍋に入れた。水を多めに入れてしまい、こぼしていると、瀬名が、「早くしろ！ のろのろしてると時間ないぞ！」

と乱暴に言った。

ユウキは鍋をガスコンロにかけ、キュウリを冷蔵庫から探した。ごそごと奥の方を探っていると、「違う、下！ 野菜入れる場所も知らんのか！」

瀬名は鉄板の上で肉らしきものを焼きながら、大声をあげた。

ユウキは冷蔵庫からキュウリをやっと見つけた。

「よく洗って、三本切ってくれば充分だから」

キュウリを手早く洗うと、まな板の上でゆっくりとキュウリを切り出した。一人暮らしをしていたときも、キュウリをスライスしたことなんて一度もなかった。不器用に切り始めたと思うと、鍋が沸騰してお湯が溢れてきた。慌てて火を弱め、また包丁でキュウリを切り始めたが、思うように薄く切れない。瀬名はそんなユウキを見かねてか、「ダメだ、日が暮れちゃうよ。時田君ね、それはいいから、ご飯をこの容器に盛ってくれる？ そうだね、二十個くらいね」

プラスチックの容器の束をユウキに渡し、瀬名は大きな炊飯ジャーの前へ行き、ひとつだけ盛って見せた。

「これくらいの量でいいから。熱いから蓋はしないでテーブルのところに並べといて」

ユウキは返事をして、容器を手にとってご飯を丁寧に盛り始めた。

そうこうしているうちに、瀬名はまな板でキュウリとタマネギを素早くスライスし、茹であがったジャガイモとニンジンを鍋から取り出してボールに移している。

ユウキはご飯を盛るとテーブルの上に並べるが、ひとつひとつの動きが遅かった。二十個終わり、瀬名に報告すると、瀬名はのり巻きを作り始めている。

「じゃ、唐揚げと、このポテトサラダと、ハンバーグをこの容器に盛って。ああ、この切ったキャベツも添えてな」

「ハンバーグはどこにあるんですか？」

ユウキはテーブルの上を見回した。

「鉄板の上に置きっぱなしだな。で、こういう感じに」

瀬名は海苔の上に酢飯を乗せたまま、テーブルの下からプラスチックの容器の束を出し、その仕切られた部分に千切りをしたキャベツと、ポテトサラダに唐揚げを乗せていった。

「ハンバーグと唐揚げ、十五個ずつね。で、この端っこのところに、たくわんを二個乗せて」

冷蔵庫から大きなタッパーを出すと、三十センチほどの黄色のたくわんが一本入っている。

「これ、切らないとね。一センチくらいに切って。ああ、これ、包丁。盛ったら、蓋して輪ゴムで巻いてね」

そう言って、慌ただしくテーブルの引き出しから包丁を取り出し、軽く水で洗ってユウキに渡した。



ユウキは言われた通りにたくわんを一センチくらいの大きさに切り、容器におかずを盛っていき、最後にたくわんを添えた。ひとつ盛り終わると、透明のプラスチックの蓋をして輪ゴムでとめ、テーブルの上に置いていく。ぎこちない手つきで、何もかもがゆっくりだった。

瀬名はかんぴょうとキュウリの海苔巻きを切り終え、今度はいなり寿司を作っていた。まるで機械のような速さでボールに入ったご飯にそれぞれの調味料を入れて混ぜ、ガスコンロに掛かっている鍋をおろし、そこに入っている油揚げをギュウギュウ絞りながら水で洗っている。

「盛りつけも雑にやらないでくれよ。売り物だからなあ。見栄えってのは大事だからね。あと、時田君の後ろにあるシールを最後に貼ってくれよ。間違わないようにね」

ユウキが後ろを向くと、小さな機械から、スーパーでよく見かけるようなバーコードと商品名と原材料、製造年月日などが書かれたシールが床に向かって垂れ下がっている。

「ここにこんな感じで、ね、ハンバーグ弁当はハンバーグのどこ、唐揚げは唐揚げに、ね」

瀬名は、人差し指で透明の蓋の右下を指して指示した。

「はい」

ユウキは手元の容器を見入ってから、ポテトサラダをスプーンで小さくすくった。

瀬名はユウキの何倍もの速さで次から次へと作っていった。油揚げの中にご飯をあっという間に詰めていった。そのうち、開けっ放しにしていたご飯の容器に蓋をし、それを店頭のテーブルに並べて手書きの値札を正面に立てた。

ユウキはやっとのことで盛りつけを終えてシールを貼り付け、瀬名の言う通りにテーブルに並べていった。

「まあ、これで朝の仕事はだいたい終わり。これで三、四時間だね。時田君は始めてから三時間だな。一応、通勤の人達が買っていったりするからね。八時くらいには出して置きたいんだよ。まあね、後は片づけを頼みたいんだけどね。毎日、こんな感じだよ。明日は四時起きでお願いします。どうかい？ できるかね」

「はい」

ユウキは何も考えずに返事をした。これから先、ずっとこの調子で出来るか不安ではあったが、今はやるしかないと思った。

「まずは、ポテトサラダはマスターできるようにね」

そして、瀬名は、すぐに洗うものと仕舞う場所を説明した。ユウキは割烹着を脱ぐと、流し台に積まれた鍋を洗い、包丁などの道具をテーブルの引き出しに仕舞った。ガスコンロの周りや黒く焦げて油っぽい鉄板もきれいに磨いた。ユウキはこんなに忙しいアルバイトは初めてだった。慣れない時間に慣れない調理、時間と速さが要求される。ひと通り終わると、疲労感だけが残った。

「ああ、洗濯しないとね。その割烹着も。洗濯したいものを洗濯機に入れといて。ああ、これ、食べていいから」

瀬名はそう言うと、出来上がった弁当のおかずとご飯を渡した。

「……あ、これいいんですか？」

「ああ、いいよ。初めてで疲れただろ」

「はい」

ユウキは、弁当を片手で受け取った。そのまま二階に行き、今まで洗えなかった衣類を出して一階の風呂場の横にある洗濯機を回した。そして、また部屋に戻り、畳んでいない布団の上に寝転がった。枕の横に置いてある目覚まし時計を手を取った。まだ八時四十五分。しばらく体を布団にくるませていると、猛烈な睡魔に襲われ、瞼が重くなった。弁当も机の上に置いたままで、食べるのも忘れるほど疲れきっていた。

\*

瀬名のもとで働き始めて、数週間が過ぎようとしていた。仕事は早朝がメインであり、その後は自由に等しかった。洗濯物を干したり、風呂掃除をしたり、最低限度の仕事をこなしても、一日の自由な時間は多くあった。ユウキは早起きをする分、午前中は寝てしまうことがほとんどであり、午後は近くのネット喫茶やコーヒーショップで暇を潰すことが多かった。ただ、瀬名が入院している妻の見舞いに出かけるときや買い出しに出かけるときは、店番を代わりにしていた。夕食は、瀬名がくれる売れ残った弁当であったり、それに飽きるとコンビニやスーパーで買ってきて食べたりしていた。自分で夕食を作ろうという気はなぜか起きなかった。瀬名は食事や生活にたいして干渉はしてこなかったものの、仕事になると一分の休憩も許さなかった。課題としていたポテトサラダの作り方はマスターしたものの、野菜を切るのは遅く、度々瀬名に急かされていた。

ユウキは、こんな生活に決して満足はしていなかった。不服を言ったらきりがないとわかっているものの、昼間の有り余る時間が嫌であった。店の前を通るスーツ姿の会社員らしい若い男性を見ると、羨ましく思えてならなかった。いわゆる会社という組織に所属している人々こそが、普通という基準の枠の中にいるような気がしていた。世の中にどれだけの種類の仕事があるにしても、身近の普通らしさにユウキは安心を求めていたのだ。今の生活はそれとは全く違う。世間に置いていかれてしまうような孤独感に襲われることのほうが多かった。また、調理をするという仕事に気持ちが乗らずにいた。食べることはしても、自分で作ることに楽しみを見いだせなかった。そもそも興味がなかった。全てを仕事として割り切ればよいものの、それが出来ないことに苦しんだ。なぜ、自分はこうも悩んでしまうのだろうか。一体、どこに向かっていったら満足するのだろうか。きっと自分は何が叶っても満足しないのだろうか。ユウキはそんな自分を知りつつも、不満を並べてしまう毎日だった。

金曜の夜になると、瀬名がユウキに声を掛けた。

「ちょっと飲みにでかけるか」

ユウキはちょうど、トイレに行こうと階段を下りようとしたときだった。

「居酒屋にでも行くか。もちろん、俺の奢りだよ」

「はい」

ユウキは急いでトイレで用を済ませ、瀬名の後をついていった。店を出て、商店街の奥へと歩いていった。

「女っけもない仕事で、つまないだろ。でも、時田君に手伝ってもらって、助かってるよ、ほんと」

瀬名は、居酒屋わら蔵と書かれた赤い看板の前で立ちどまり、

「ここ。たまに飲みにいく店」

と言ってガラス戸を引いて暖簾をくぐった。

店内はこじんまりとし、座敷のテーブルがいくつか並んでいるだけだった。

「ああ、瀬名さん、いらっしやい」

五十代くらいのエプロン姿の女性が、元気のよい声で言った。

「一番奥の席、座るよ」

瀬名は何の構えもなく言い、ユウキを誘導して座るよう促した。ユウキは靴を脱ぎ、小さな座布団の上にひざまづいた

。

「あら、瀬名さんとこの息子さんですか？」

「いやあ、違うよ。息子は東京行ったっきり、帰ってこないよ」

瀬名はエプロンの女性に笑いかけた。

「何飲みます？」

「ビール。ビールでいいかなあ？」

「はい」

「足崩して、仕事じゃないんだから。固くならなくていいから」

瀬名は小声でユウキに言い、ビールをふたつ頼んだ。

「いつも悪いねえ、嫁さんがいないから、こき使っちゃってね。早起きも辛いだろう」

いつになく、瀬名は優しく言った。

「まあ、でも、もう慣れました」

「よくやってくれてると思うよ。他の子なんかね、一日目の途中で帰られちゃったことあるよ。いきなり怒ってね。なんか悪いこと言ったかなあって思うけどね。つつい忙しいと言葉が乱暴になっちゃうもんでね。で、時田君の実家はこのへんじゃないのかい？」

ユウキは高崎に実家があることや、これまでの経緯を話した。アルバイトで解雇され、その後仕事が見つからずにもどうでもアパートを出なければならなかったと告げた。香織のことは無視をして話した。

そんな話をしているうちに、ビールと刺身や焼き鳥などが運ばれてきた。

「ああ、悪いねえ。いい青年だろ。うちでバイトしてるんだよ」

「あらあ、そうですか。瀬名さんのところで働いてらっしゃるのね」

エプロンの女性は、まるで自分の子供にでも声を掛けるように親しげにユウキに笑いかけた。ユウキは少しだけ口元を緩め、軽く会釈をした。そして、料理を静かにテーブルに置くと、すぐに行ってしまった。

「仕事ってそんなにないのかい？　うちじゃあ、人手不足なんだけどね」

瀬名はジョッキを持ち、ビールを勢いよく飲み込んだ。

「ハローワーク行っても、なかなかないですよ」

「ハローワーク？　なんだね、それ」

「ええと、昔は職業安定所って言いましたけど」

「ああ、なるほどね。ハローワークなんてシャレた名前になったんだ。そういうところで求人すればよかったのかね。貼り紙ってのは、時代遅れかね」

瀬名はジョッキを置いて、豪快に笑った。

「時田君は、彼女でもないんかね？」

「はい、いないです」

「そうか。いたら、こんなところでバイトしないよな。でも、まだまだ若いんだしね。さあ、どんどん食べなさい」

そう言われ、ユウキはビールを一口飲み、刺身を一口食べた。

「嫁さんがね、入院して一ヶ月たつけど、まだまだ帰ってこれそうにないなあ。いやあ、困ったねえ」

突然、瀬名はしんみりした調子で呟くように言った。

「具合、悪いんですか？」

「ちょっとねえ、時田君がここに来る数日前にね、心臓の手術したんだ。手術はうまく言ったって先生は言うんだけどね、寝たきりで、点滴してるしなあ。意識もはっきりしてないような感じなんだよ。息子には、見舞いに行くよう連絡してあるんだけどね、行く気がないみたいで。……仲悪かったからね。弁当屋を継ぐとか継がないとかで。俺はさあ、親父の店継ぐの嫌だったから、息子も嫌だろうって思って無理なこと言わなかったけどね、嫁さんはそうじゃなかった。東京の携帯のゲームを作るとかいう会社、なんだかわからないけど、そういうところに勤めるなんて言ってね、嫁さんはそんなわけわからない会社勤めるのをやめて、うちを継いでほしいって。いやあ、ほんとなら俺が言うことなんだろうけど、嫁さんがその気でね。親父が死んでから、ずっと俺と嫁で続けてきたし、惜しいって気持ちはあったけど。店も古いし、息子はとっとと東京に出ていったよ。どんな生活してるのかもわからないけどね」

ユウキは瀬名の話に黙って聞いていた。どこの家庭でもいろんな問題を抱えているものだと痛感しながら、店に一人残された瀬名に同情していた。

「携帯のゲームを作るって、そんなに儲かるのかい？」

ビール一杯も飲み終わっていないのに、瀬名の顔は真っ赤になっていた。

「今は流行ってますけど、僕はそういう仕事わかんないです。でも、人気があるからそれなりにもらえると思いますよ」

「ああ、そうかあ」

瀬名はあまり理解していないようだったが、安心したように頷いた。

「まあ、いいさあ。しかたないよな、息子の人生だもんなあ。親が決めるわけにはいかないしねえ」

瀬名は哀しいような目をして笑った。アルコールのせいかもしれないが、うっすら充血している。その後、瀬名は何でもなかったかのように、ユウキに仕事の手順を話し始めた。包丁の持ち方から切る方向、混ぜ方や箸の持ち方まで細かく指導した。酔っているのかそうでないのかわからなかったが、瀬名は熱心だった。ユウキは半ば面倒に思いながらも、瀬名の言葉に耳を傾けて頷いた。

そんな話だけで夜は更けていった。ユウキは二杯ほどビールを飲み、さほど酔ってはいなかったが、頭痛が軽くした。瀬名は一杯しか飲んでいないもののふらつき、ユウキの手を借りて店まで戻り、布団を敷いてすぐに寝てしまった。ユウキも明日の仕事のことを考えてすぐに布団に入った。すると、携帯の着信音が鳴って飛び起きた。メールだった。まさかと思ったが、香織からだった。

『ユウキくーん、白井ちゃんみたいに、死んじゃったりしてないよね?』

そう書かれていた。

ユウキはすぐに削除し、着信拒否の登録をした。なぜ、こんなメールを送ってくるのか。白井って、パチンコ屋のトイレで自殺した男の名前だっけ。民野香織って女は、この僕さえも死なせようとしているのか。怒りだけがふつつつと沸いてきて、布団を頭から被って体を丸めた。

\*

ユウキは、急に瀬名の妻を見舞うため病院に行くこととなった。心臓の手術をしてから一ヶ月以上たった十一月下旬の木曜の早朝、病院から意識が戻りそうだと連絡が入ったのだ。瀬名はいつになく、元気そうに客の相手をしていた。病院の面会時間が始まる午後二時に、瀬名はユウキも一緒に行ってくれるよう頼んだのだ。

「嫁さんは店のことずっと心配してきたし、時田君みたいな青年が手伝ってくれていると思うと、安心すると思うんだ。あまり焦って家に帰ってきてもらってもね。病人は休まないで治らないからな」

瀬名の言い分だった。

午後一時十五分前になると、店頭のまだ半分も売れていない弁当をいったん店に仕舞い、出かける準備をした。瀬名の機嫌はよかった。

瀬名の白いワゴン車に乗り込み、二人は病院に向かった。

「嫁さん、びっくりするだろうな。こんな立派な青年が仕事手伝ってくれていると思うと。なあ、嫁さんに、安心して休んでくださいって言うてくれないかな。俺一人だと早く帰りたいだろうし。心配性なもんだからさあ」

「はい、僕でよければ、奥さんに言いますよ」

「悪いなあ。ほんと、時田君に来てもらって感謝してるよ。時田君が作ってくれた弁当、持ってきたんだけど、食べてくれるかなあ。まだ無理かもしれないけどね、まあ、見せるだけでもいいか」

瀬名はいつになく朗らかに笑った。ユウキも、これで瀬名の妻が元気になって戻ってくる日も近いと思うと、嬉しかった。瀬名は乱暴な言い方をすることもあがるが、人のよさをユウキはよく知っていた。どんな優しい言葉をかけ、どんな礼儀正しい態度をとることよりも、その人から滲みでるものを感じることが重要であった。決して豊かとは思えない小さな店を守っている瀬名は何も傲ることもなく、妻の身を心から心配しているごくごく普通の人だった。そして、素性も知れない通りすがりの自分を雇ってくれたことが、ユウキにとって何よりも大きかった。

車で十分ほど走らせると、佐倉ヶ丘病院に着いた。

二人は病院の入り口に入り、すぐ横にあるエレベーターに乗った。

「二階の二〇五号室なんだ。手術して一週間くらいは集中治療室に入ってたけど、今は一人部屋にいるよ」

瀬名は弁当の入ったビニール袋を手に持ち、エレベーターが開くのが遅いと言いたげに落ち着きなく足踏みを軽くした。ドアが開くと、まっすぐ歩いていった。手前から二〇一号室から並んでいる。病屋の入り口には四、五人の入院患者の名前が書かれている。二〇五号室は二階の一番奥だった。二〇五号室の入り口には、瀬名千鶴子の名が書かれていた。

「やっと着いた、よかった」

瀬名はそう言って部屋に入っていった。

ベッドには瀬名の妻が横たわっていた。布団の横からはたくさんのチューブが出ている。口は酸素マスクで覆われ、顔がよく見えなかった。瀬名は小さなテーブルの上に弁当を置き、ベッドの横で、

「おい、千鶴子、おい」

と妻の肩を軽く叩きながら声を掛けている。

「全然、意識なんか戻ってないじゃないかい。ちょっと、先生呼んでくる」

瀬名は形相を一変させ、すぐに病室を出ていった。

ユウキは横たわっている瀬名の妻のそばに寄り、顔をじっと見た。目は瞑ったままだった。瀬名がなかなか戻ってこないで、ユウキは瀬名の妻の耳元で声を掛けてみた。

「千鶴子さん、起きてください。千鶴子さん、弁当持ってきましたよ、千鶴子さん、起きてくださいよ」

そう言うと、微かに首を傾けたように見えた。ユウキは続けて、名前を呼び続けた。すると、目をうっすら開けて、ユ

ウキのほうを見た。ユウキはあっと思い、瀬名を呼びにいこうかと思ったが、酸素マスクの奥で唇の動きを見てとどまった。何か言っている。ユウキは口元に耳を近づけた。

「……ああ……ケイスケ……戻って……きてくれた……」

今にも消えてしまいそうな声が、ユウキの耳に届いた。ユウキはさらに耳を近づけた。

「……よかつ……た……」

ユウキには確かにそう聞こえた。

瀬名が医師を連れてやってきた。

「先生、意識戻ったって電話あったのに、全然反応しないじゃないですか」

「昨夜、右手の指が動きましてね。少し戻ってきたと思うんですけどね」

「ええ？ それだけですか？ これから、ちゃんと戻るんですか？」

「いやあ、まだまだ予断を許さないです。よくても、意識は混濁したままだと思います」

「そんな。こっちは、意識戻ったって思ってきたのに。なんです、そんな期待させといて」

瀬名の声はだんだん大きくなっていった。

「朝っぱらから電話もらって、何なんです。そのつもりで来たのに、なんでそんなこと言うんですか。戻るんですよ、意識。先生はいつもごまかしてばかりじゃないですか」

「申し訳ないですが、まだ、あと一週間は経過してみないとわからないです。今のところは、体のところどころの神経が反応する程度だと思います」

医師はそう言うと、病室を逃げるように去っていった。

「……ああ、何なんだい」

瀬名は溜息をつき、ベッドの横のプラスチックの華奢な椅子に座った。

「さっき、ケイスケって言いましたけど」

ユウキは言った。

「あ、ほんとかい！ 千鶴子、千鶴子！」

瀬名は妻の耳元で名前を呼び続けた。しかし、妻の反応は何もなかった。ユウキも千鶴子さんと何度も声を掛けたが、唇が動くことも目を開けることもなかった。

帰り際、ユウキは、ケイスケとは瀬名の息子の名前だということを聞いた。瀬名は行きとは違い、とたんに無口になり、車を運転している最中は終始呆然としているように、ユウキの目には映った。せっかくもってきた弁当も、車の後部席に乱暴に置かれたままだった。

その翌日の昼、瀬名の妻は亡くなった。

\*

瀬名の息子が帰ってきた。自分の部屋に見知らぬ男が住んでいることを疑問に思ったらしく、一階の居間で瀬名に何度も聞いていた。

「バイトを住み込みさせるって何考えてるわけ？」

「朝早いからだよ。一番忙しい時間に手伝ってくれないと困るからだよ」

「何考えてるわけ？ 親父っさあ、今どき、バイトを住まわせるなんてバカなことするなあ。しかも俺の部屋、占拠されてるし、俺、どこで寝ればいいわけ？」

「恵介、今、そんなどころじゃないだろ。お母さんが亡くなって大変なときに……」

ユウキは居づらくなり、居間に言って何事もなかったように言った。

「僕、外で泊りますから。何かあったら、携帯に連絡してください」

「時田君にも、悪いね。親戚とかいろいろ集まるからさあ。明日から三日間は仕事休みにするから。悪いねえ」

「三日後に戻ります」

「ほんとは、時田君にも参列してほしかったけどなあ」

「黒のスーツもありませんし、邪魔になりますから」

「そうか。本当に悪いねえ」

瀬名は申し訳なさそうに言った。

ユウキは、急いで二階に置きっぱなしの服や携帯など生活に必要として置いておいたものを急いで片づけ、スーツケースの中に仕舞い、ショルダーバッグに下着や財布、携帯などを入れた。またネット喫茶にでも泊ればいい。そう思い、瀬名の店を出た。

瀬名の妻が呆気なく亡くなってしまい、最後に自分を息子と間違えて見えたのだろうと思うと、ユウキはそこに自分が入れたことがよかったと思った。

ユウキは瀬名の店から駅のほうへ向かって歩いた。足どりは重かった。これから瀬名が一人で背負っていく店はどうなるのだろうと思った。息子は店を継ぐ様子も、手伝う様子も見られなかった。母親が死んだというのに、それに悲しんでいる様子もなかった。それとも心の奥では悲しんでいるのだろうか。ユウキがいくら想像してもわからなかった。香織のときもそうだった。腹の中では何を考えているのかわからない。それをどうこう思い巡らすのは、バカバカしいことだ。しかし、少なくとも瀬名は、心を傷めているだろう。一体、あの店を一人とアルバイトでやっていけるのだろうか。

歩道橋を渡り、その中央で立ちどまった。前と変わりなく、道路を車が凄まじい勢いで走っている。ここから落ちれば人の命など一瞬にして消えてしまうだろう。肉体も精神も、どこへ行ってしまうのかわからないが、何もなくなってしまうのだ。そう、何もなくなる。ユウキは本当にそうだと思った。今までの記憶も今まで関わった人達も、過去の辛かった出来事も将来の希望も全てがなくなる。心や体の傷みを消えてしまうだろう。そして、今ある自分の状況も、立場もなくなるのだろう。そう思うと、楽になるはずの死が逆に怖いとさえ思った。何もなくなり、自分の周りを取り囲んでいた人達の記憶からも消えていく。どんな生き方をしても、それっきりなのだろう。生まれてきて、苦痛を感じるだけで怠惰に生き続けるのは、単純に死が怖いからだ。消えてなくなるのが怖くてしかたがないからだ。だから、僕という人間は生きている。消極的な考えしか浮かばないが、そういう理由でしか生きれそうになかった。誰が認めてくれなくても、自分が生きる理由はそんなものでしかない。

ユウキは歩道橋を歩き始めた。下を走る車を見ればせわしいと思い、晴れ渡った青い空を見れば果てしないと思った。何の目的なんてなかった。自分の今も将来も空に似ていた。誰かと競争をしているわけでもなく、これからの展望もない。だから、まだ何かありそうな気もした。

駅近くまで行くと、ここを放浪していたときのことが蘇ってきた。民野香織から金をとられ、行き場もなくただ歩

き回っていた自分。ドーナツショップで何時間を時間を潰していた。そんなことを思いながら周囲を見ていると、パチンコ店の旗が目に入った。

『怒濤の一日！ 本当のスゴさを知ってください！』

赤の字で、そんなことが書かれていた。

決して多くはないアルバイト代や、忙しい朝の仕事を思い出すと、やる気が起こらなかった。アルバイト代なんて一瞬にして消えてしまうことがわかっていたからだ。また、それ以上に、民野香織の存在が大きかった。嘘をついてまで人を陥れ、それを蚊でも潰して喜ぶかのように自分は平然として生きている。あの二百万を何に使っただろう。おいしいものを食べ、買いたいものを好きに買い、それで満足しているのだろうか。あの皮肉でしかないメールが送られてきてから、憎しみしか湧いてこないのだ。パチンコをやりたくないのは、民野香織の思う路線に入り込まないためだ。

ユウキはパチンコ店から目を逸らしてコンビニ入り、文庫本サイズのマンガを買い、ドーナツショップに向かった。

ネット喫茶で夜を過ごし、四日目の午後に瀬名の店に戻った。

店の窓は締め切られてひっそりとしていたが、裏口のドアは開けっ放しだった。そこから入ると、一階の居間のテーブルの前に瀬名は座っていた。

「瀬名さん、今日はやらないんですか？」

ユウキは立ったまま言った。

「ああ、悪いねえ。今日はまだ休みにしといたんだよ。やる気になれなくてね」

瀬名はユウキを見上げ、いつもと変わらない調子で言った。

「外で泊ませちゃって悪かったね。息子は、すぐ帰っちゃったから、二階は前と同じように使っていていいから。あいつ、母さんが死んだっていうのに泣きもしないし、平気な顔をして親戚の叔母さんと仕事の話なんかしててさ、全く、あきれちゃうよな。誰に似たんだか知らねえけど、俺は情けないっていうかあ……」

「長い間家を出てると、そんなものじゃないですか？」

ユウキはそう言うと、瀬名は強い口調で言い返した。

「そんな、時田君がくる二ヶ月くらい前に出てったんだよ。二十四年間、この家にいたんだよ。子供なんてのは、本当にあてにならない」

そのときはじめて、瀬名の息子の年齢をユウキは知った。自分より一歳年上だが、たいして変わりはない。母親とは瀬名の息子にとってどんな存在だったのだろう。二十四年間の歳月とともに、何かが変化して歪んでいってしまったのかもしれない。ユウキは自分と重ね合わせた。高崎の実家を出てから五年にもなる。いまだに母親からの心配の電話がかかるが、鬱陶しく感じる。おまけにさまざまな嘘をついているうえに、民野香織という女に騙されて金もとられた。本当のことも言えずにいる。母親は、息子はヘルパーの資格をとるために学校へ行っていると思込み、安心しているのだろう。その場その場で、都合のいいようについてきた嘘。子供の頃は、両親を信頼して何でも正直に言っていたにちがいないが、今はそんなものかけらもなくなった。自分という人間は、なんて親不孝なんだろうとユウキはつくづく思った。

「結局、見舞いにも来なかった、バカだよ、ほんとに。会いたかったと思うよ。時田君のこと、あいつと間違うなんて……」

瀬名は、何も置かれていないテーブルの中央を呆然と見つめていた。瀬名の後ろの窓際には、妻の遺影が飾られ、その前に骨壺が置かれていた。線香などはなかったが、黄色と白の菊の花が花瓶いっぱいにささっている。簡素ではあったが、花が彩りを添えて華やかにさえ見えた。

「死んでしまうのとはやっぱり違うなあ。がっかりするね、もう何もないんだからさ。仕方ないってわかってるんだけどね……」

その後、瀬名はこう続けた。

「死んでしまうなんて思ってなかった。よくなるんだって、俺は思ってきたのに。もう自分は独りなんだって思うと淋しいよ。嫁さんとやっとここまで生きてきたのに、いきなり逝かれて、俺はこれからどうしたらいいんだよ。なあんにもできないんだよ、俺って弱いだろ、ほんとに弱いんだよ」

そう言って嗚咽を漏らした。



「俺があ、独身だったら、強くなれたかもしれないな。独りだったら失うものなんてないもんな」

ユウキはショルダーバッグを肩からおろし、瀬名の横に座り込んだ。

「そんなこと言ったら、奥さんが悲しみますよ。奥さんとの生活はいい思い出じゃないですか。思い出があったからこそ、これから強く生きていかなくちゃいけないです」

ユウキは自分が言葉にした内容に、果たしてどんな意味があるのかもよく考えていなかった。ただ、瀬名は深く頷いてくれた。そして、自分はたいして強く生きていないくせに、偉そうなことを言ってしまったと後悔した。ユウキは瀬名の嗚咽がおさまると、ショルダーバッグを置きに行こうと二階へ向かった。

ショルダーバッグから汚れた服などを出し、スーツケースの横に置こうとしたとき、壁際にタバコが一本転がっているのに気づいた。スーツケースの中を出したときに、奥から出てきたのだろう。もちろん民野香織の部屋から拝借したものだった。ユウキはそれを拾い、瀬名にあげようと居間におりていった。

「瀬名さん、これ、吸いますか？」

「あ、タバコかい？ 二年前にやめたんだ、体に悪いと思ってね。それまではヘピースモーカーだったんだけどね。やめたら五キロも太ってねえ」

「そうなんですか」

「時田君はタバコ吸うんだっけ？」

「いえ、吸いませんよ」

ユウキはタバコを半分に折って潰し、居間の端に置いてあるゴミ箱に投げ捨てた。

「明日から、また始めようか。じっとしててもくよくよしてるだけだしね。また、頼みますよ」

瀬名は気を取り直した様子で立ち上がり、ユウキの肩をポンと叩いてトイレのほうに向かっていった。

\*

瀬名は以前と変わりなく、仕事に打ち込んでいた。時折、ユウキに弱音を吐くこともあったが、亡くなった妻のためと思って気を取り戻した。ユウキは不器用なりに瀬名を励まし、どうにか朝の仕事をこなしていった。売り出した弁当は三分の一くらいは残ることが多かったが、瀬名はいつもと変わらず愛想よく接客にも応じていた。

「テレビ、買えるようにしようと思って。今時、テレビがないって淋しいだろ。去年質屋に売ってから、買おう買おうと思ってそのままになっちゃったんだよ。一日の楽しみもないようなもんだ。でもねえ、テレビって高いからなあ」

瀬名は新たな目標を作ることで、毎日の仕事に弾みをつけようとしているかのようだった。ユウキは、瀬名の家にテレビがないことに以前から気づいていたが、それをあえて口にすることはなかった。自分は携帯でテレビを見ることもでき、さほど不満ではなかった。画面が小さいということくらいで、なくてはならないものではなかったのだ。

「いくらくらいするんですか？」

ユウキは関心ありげに聞いた。

「十万くらいじゃないかな、その前後か……」

「結構しますね」

「まあね。無理すれば買えるけど、先のことを思うと買いたくないね」

「宝くじで、何億も当たったらいいですよね」

「いやあ、投資するのが無駄ってもんだよ」

瀬名は笑った。

季節が移り変わり、瀬名の妻が亡くなってから一ヶ月もたつと、少しずつではあったが、瀬名はよく溜息をつくようになった。客の相手をしているときは勢いがいいが、ふとした間が空いたときにフーツと大きな息を吐いた。ユウキと瀬名と一緒に夕食をとっているときもそうだった。ユウキは疲れているのだろうと思い、朝はさらに一時間早く起き、率先して準備に取りかかった。瀬名は申し訳なさそうに、悪いねえといつも言っていたが、ユウキは気にはならなかった。ただ、瀬名が妻の死を乗り越えて前向きに生きていけることを願ってやまなかった。

ある夜、瀬名の元へ電話がかかってきた。息子の恵介からだった。

「結婚したって何言ってんだね。なんで、俺に紹介しないんだ。どういうことなんか、説明しなさい」

瀬名は声を荒げた。

「ええ、みっともないって。別に家に連れてこなくても、東京のレストランでもいいだろ。え？ 俺が。なんで？ 俺のどこがみっともないのか言ってみろ！」

散々言い合った挙げ句、瀬名はガチャンと受話器を置いた。ユウキは布団に横になっていた体を起こし、居間においていった。

「何かあったんですか？」

瀬名は困りきった顔をして言った。

「恵介が、結婚したんだそうでね。相手の両親は国家公務員で立派だし、学歴もあるし、俺には会わせられないと。もう籍は入れて一緒に暮らしてるんだと。勝手なもんだよ。国家公務員ってそんなに偉いのかね？」

「今の時代、安定してるのは公務員くらいですよ。そういう意味で、立派だとか思い込んでるんじゃないですか？」

ユウキは瀬名を気遣いつつ言った。

「そっか。安定。安定してるのが一番かあ。中卒の弁当屋では割に合わないってことなんだろうなあ。息子に絶縁され

たみたいで淋しいもんだ」

瀬名は長い息を吐いた。

「僕は、そう思いませんよ。学歴も職業も、何が立派かなんて、誰も決められないです。決めているのは、一部の人だけです。そう……、一部の、……頭の偏った人だけです」

「まあ、いいんだ、時田君が息子ならよかったよ。ありがとう。こんな家の揉め事なんかにさ。明日も早いから、早く寝てください」

そう言われ、ユウキは二階に戻った。

瀬名の気持ちを変えられるだけの言葉は持ち合わせていないことに、ユウキは気づいていた。言葉も内容も理屈なんかではない。現実を快く生きて暮らしていくことは、とても難しいことだった。自分に何ができるだろう。何をすることが、一番正しいことなのだろう。ユウキの頭を巡っては答えは出てはこなかった。布団に横たわり、天井の焦げ茶色の木目を見つめていた。

「僕ができることって……」

そう呟いた。

瀬名は率先して買い出しに出かけることもなくなり、度々ユウキに頼んだ。今日も業務用の品物が売っているスーパーまで油や塩や胡椒などの調味料を買ってきてほしいと言われ、ユウキは瀬名がいつも乗っているワゴン車を走らせた。ラジオをつけると、ちょうど三時になったこともあり、ニュースが流れた。世間を騒がすような残虐な殺人事件や事故の話題が多い。相変わらず物騒な世の中で、そんなニュースしかないことに陰気な気分になり、ユウキはラジオを消した。また、今、世間で流行っている音楽もどんなものなのかわからなくなっていた。本や漫画や音楽、さまざまな情報を自分から得なくなっていたのだ。携帯での情報もかぎられていて、瀬名の息子が作っているかもしれないゲームをして時間を費やすことも多かった。

最近では、昼も夜も瀬名のそばにいた。客が来ないときは、一階の居間でお茶を飲んでラジオを聞いていた。テレビでもあれば少しは話題が広がりそうだったが、沈黙になることも多くあった。瀬名には、朝の四、五時間しかアルバイト代は出せないと言われていて、ユウキもまた、それ以上の報酬をもらおうといった魂胆は微塵なかった。はじめは頻繁に行っていたネット喫茶や喫茶店も、少ないアルバイト代を思うと、瀬名の手伝いをしているほうがまだいいような気がしていた。瀬名はユウキの手伝いにはじめは恐縮していたものの、自分が疲れているときはいろいろと頼むことが多かった。今日もそんな日だった。

ユウキはスーパーに向かっていた。久しぶりの車の運転は怖く、四十キロほどのスピードで走らせた。道端の標識や歩行者に絶えず目をやり、慎重であった。あと五十メートルほど先の信号を右に曲がると、スーパーに着く。前後の車がなかっただけにアクセルを踏もうとしたときだった。左横の歩道を、黒のズボン姿の髪の長い女性が歩いているのが目に入った。

「ああ……まさか……」

ユウキはスピードを落とした。

民野香織だった。黒のジャージのズボンに、黒のダウンジャケットを羽織っている。茶色の髪は、背中から三十センチほどの長さになっていた。民野香織だとわかったのは、彼女の歩き方だった。体を引きずるようにけだるく、世間に刃向かうような歩き方。以前はそれほどでもないと思っていたが、遠くから見るとそれがひどく目立って見えた。前と変わりがなく黒のジャージのズボンを穿き、伸ばしっぱなしの髪もだらしがなく映った。また、パチンコをやって、ターゲットとなる男を見つけて騙しているのだろう。そうこう思い巡らせているうちに、民野香織の横を通り過ぎた。

バッグミラー越しに顔が見えた。何をみているのかわからないが、視線だけはまっすぐと前を向いていた。色白で澄んだ目をし、口も小さく、可愛らしい顔には変わりはないが、あの惰性的な歩き方があの女の全てを表しているとしたら、ユウキには思えなかった。

「なんて女だ！」

ユウキは吐き捨てるように言った。

スーパーで頼まれたものを買って終えると、瀬名の店に戻った。

瀬名は居間のテーブルに頬杖をついて、ユウキにこう言った。

「最近じゃあ、コンビニの弁当のほうがいいんだろうね。コンビニのほうがかうまいし、安いんだろ？」

「高いのも安いのも、いろいろありますよ」

「そっか。でも、うちみたいに四百円なんて、高いんだろうね。それに、弁当屋のチェーン店だってあるしね。なかなか売れない時代でね。昔は結構売れたんだけどねえ。嫁さんの知り合いが買いにきたりして、繁盛してたんだけど、俺はそんな器量ないしなあ」

瀬名は笑った。

「値段を少し下げてください。三百八十円とか」

「ああ、そうだね、そうしょうか」

ユウキの提案を瀬名はすぐに受け入れた。

「売れ残りがないように、値段をまずは下げてみて、様子を見よう、それがいいな」

そう言って、瀬名は調理場のほうへ行ってしまった。

ユウキも買ってきた調味料を持ち、瀬名の後を追って調理場へ向かった。

\*

年が明け、ユウキは瀬名の家に居着いていた。瀬名の妻が昨年亡くなったことで、正月らしいものは何もなかった。店を三日まで休みにしたが、瀬名とユウキはどこへ出かけることもなく、一階の居間でごろごろとして過ごしていた。

ユウキは実家に帰らなかった。大学に入学してから卒業するまで、正月を実家で過ごそうと思ったこともなかった。一人のほうが気楽だった。実家では親戚中が集まって挨拶や近況報告で忙しかったが、それもユウキには興味のないことだった。どうせ何をしているのか、将来は何になりたいのか、お父さんと同じ医者にならないのか。そんなことばかり質問されるのがわかっていたからだ。今年も帰らないことに、母親が文句を言うこともなかった。ただ、瀬名はこんなことを言ってきた。

「お父さんもお母さんも、心配してるだろうに。大学卒業したんだもの、それだけでいいじゃないか。仕事なんてこれからでいいからさあ。顔を見せるだけでもいいんじゃないかなあ」

「僕は……、立派な息子じゃないんです。いとこだって、当たり前のようにいい大学行って、安定した職業に就いてますよ。それに、いろいろ聞かれるのが嫌なんです。つまらないことばかり聞かれて、正月って憂鬱なんですよ」

「そんなこと、時田君の思い込みじゃないかなあ。立派じゃないって、自分でそう思っているだけなんだよ、きっと。俺からすれば、時田君は立派な青年だって思えるんだけどなあ」

ラジオからは正月にちなんだ俳句が読まれ、家族の暖かな正月のエピソードが紹介されている。そんな、のどかなラジオからの風景が鬱陶しく、この世の中の正月は平穏と絆で結ばれているのだろうと思うと、ユウキは不快にさえ思った。

「そんな……。僕はそんな人間じゃないです」

「違うよ。誰がそう決めたのか知らないけど、少なくとも俺はそう思わないよ。時田君の周りは、立派な人が多すぎるんだよ。俺みたいに、欲の少ない生活をしてると、周りを見なくなるんだ、いい意味でだよ。いつか、実家に帰って、一度でも顔見せてくればいいよ。すぐ帰ってくればいいからさ」

瀬名はテーブルの上のみかんを、妻の遺影の前にポンと置いた。

ユウキは黙ったままだった。親の期待に何ひとつ応えられていない自分が嫌でたまらなかった。そんな憂鬱そうなユウキの顔を見てか、瀬名はみかんを目の前に置き、

「まあ、忘れて食べなよ。時田君にとっては、正月なんだよ。新しい年だよ」

と言った。

ユウキは少しはにかみ、みかんを剥き始めた。

正月が過ぎ、また忙しい毎日が始まった。ユウキの提案のもと弁当の値段を下げたが、売り上げが伸びるということもなかった。瀬名もそんなことを予測していたかのように、たいして消沈することもなかったが、ハンバーグに火がよく通っていないなどといったクレームが増え、少しずつではあったが客足が減っていた。瀬名はそんなことを気にしてよく焼くようにしたが、逆に焦げ目が増えて見栄えが悪くなり、半分も売れないことがあった。

「やっぱり、料理ってのは感覚だよなあ。センスもあるけど、体温っていうか、体温で料理するっていうか、そういう感覚だよなあ」

瀬名は独り言をよく口にした。

夜十一時近くなると、ユウキは布団に横たわって携帯のゲームに没頭していた。携帯のボタンをリズムを刻むように

打ち、勝っても負けても繰り返し繰り返し同じゲームを続けてしまう。中毒のようでもあった。パチンコもそれに似ていると、ユウキはふと思った。同じことを繰り返していた。単純なゲームであればあるほど、そこにはまる。パチンコもそんなからくりではまりこんでしまっていたのだろう。

「バカだなあ……」

そう呟きながら、また携帯をいじった。

ユウキはふと思い立ったように、一階に下りて調理場にいた瀬名に声をかけた。

「瀬名さんは、パチンコってやったことありますか？」

瀬名は驚いたように振り返り、ユウキを見た。

「もう寝たのかと思ったよ。びっくりしたなあ。え、パチンコがどうしたって？」

「瀬名さんはパチンコやったことあるかと思って……」

「やらないよ。やったら大変なことになるだろう？ 店が潰れちゃうよ。何だっておおもとが儲けられるようになってるってもんだよ」

「でも、もしかしたら、勝てるかもしれないって思ったりしませんか？」

「昔、若いときにやったことあるんだよ。一回で十萬くらい勝ったときあったけど、続けているうちに、そんな十萬はすぐなくなってね。勝ち負けで言えば大負けってとこだけどね。で、やめたんだ」

「何をきっかけに、やめたんですか？」

ユウキは関心があった。自分は民野香織の罠にはまらないためにやらないでいる。少なくとも今は。けれども、これから先、やらないともかぎらない。何か決定的な理由をもちたかった。瀬名がやってはいけないと強く言ってくれたら、パチンコを連想したりせずに、それに関わりをもった民野香織のことも忘れられそうに思えたのだ。

「やめようと思ったからだよ。パチンコ台に、自分の財布から絞りとって金を入れるってのがさあ、限界だって言うか、辛かったし怖かった。金に執着する自分が嫌だったし、そのまま続けているのはダメだって思った。そのダメだっていう危機感がやめさせたってとこかな」

「今は、もうやらないんですか？ もし、金があったらやりますか？」

「学校の先生みたいだな、そんな質問されて」

瀬名は、真顔のユウキの顔を見て笑った。

「まあ、やらないな。金があってもさあ。他のことに使うよ。そのほうが豊かだもんな。今、金があったら、嫁さんの立派な仏壇でも買うよ」

瀬名はそう言うと、ユウキに背中を向け、鉄板の上に置きっぱなしのタワシで鉄板をごしごしと擦り始めた。

ユウキは二階に戻り、電気を消して布団に潜り込んだ。パチンコのことなんて、なんで思い出したりするのだろうかと自分を責めた。もう忘れよう。自分にとって大切なことを選んでいこう。これからの将来、自分にとって一番必要なこと。それは一体何だろうか。自分のために、それとも……。頭の中から断続的に浮かんでは消えていくたくさんの言葉に疲れ果て、そして、ユウキは深い眠りに落ちていった。

翌日の午前中、朝の仕事がひと段落すると、ユウキは瀬名に告げるを決心した。それは今までずっと考えてきたことだった。毎日考えては迷った。決め手は瀬名の人柄だった。地位でも名誉でも、金でもなかった。

「瀬名さん、僕、この店をやっていきたいんです。この店をもっと大きくして繁盛させたいんです。それが、僕の夢です」

そう言うと、瀬名は大きな声で笑った。

「何バカなこと言ってるんだい。気持ちは嬉しいけど、無理なことってあるんだよ。これから未来ある若者をさ、傾いた弁当屋に押し込むことなんてできないよ。俺にもプライドってのがああるよ」

「でも……」

ユウキは口ごもった。

「時田君は、もう少ししたら、もっと違う世間に出るんだよ。俺はそういうつもりだからね」

瀬名にそう言われると、ユウキはそれ以上強く言うことができなかった。自分の想いは呆気なく崩れ、またそれを覆すほどの強い意思をもっていないことも知った。ユウキは一瞬にして目的を失った。しかし、今すぐに大きな展望を抱いて世間に出ていく勇気もなかった。

「いいんだよ、ありがとう、本当に。ありがとう」  
瀬名は言った。

\*

瀬名から自分の意思は断られたものの、ユウキはいつもと変わらず仕事をこなした。これからのことはわからなかったが、今出来ることは瀬名の元で仕事をする事だった。いつか時か解決してくれると思いつつも焦ってもみたが、何も思いつかなかった。

土曜の夜十時過ぎ、いつものように布団に入って携帯ゲームをしていると、突然着信が入った。母親からだ。ユウキはゲームを中断させられて不服だったが、母親の声高な声が耳に届いた。

「ユウキ、ヘルパーの資格って何月までかかるの？ 学校行って忙しいの？ ユウキが頑張ってるのに、本当に悪いんだけど、ねぇ、お父さんが病気のよ。帰ってきてくれないかしら？ 資格のほうはどうなの？ 学校のほうはいつだってお金だったら出してあげるから、今は帰ってきてほしいのよ」

母親は一気にそう言った。

「何だよ、いきなり。家に帰ってこいって」

ユウキは、資格のことや家に帰ってきてほしいとを言われ、途端に不機嫌になった。

「だって、お父さん、病気なんだもの。お願いよ」

「いきなり何だよ、父さんが病気ってどういうことだよ。どうせ大したことないんだろ。自分の病院で診てもらえばいいじゃないか」

ユウキがそう言い放つと、母親はバカ！と大きな声で言った。

「病気っていったって、胃ガンなのよ。医者からは、あと一ヶ月くらいだろうって言われてのに……それでも、ユウキは帰ってこないの？ お正月も帰ってこないで。とにかく帰ってきてほしいの」

「……えっ」

胃ガンだのあと一ヶ月だと言われ、ユウキの頭は真っ白になった。突然のことに事態がよく呑み込めなかった。

「ガンが進んでるってこと？」

「そう。先週、手術でお腹を開けたんだけど、全部取れなくて閉じちゃったの。お父さんには手術して悪いところは取ったって言ってあるし……。お父さんだってプライドがあるじゃない。自分の病院では診てもらってないわよ。今は家に帰ってきてるし。医者からはね、好きに過ごしていいって言われてるのよ」

「なんでそんな大事なこと、早く言ってくれなかったんだよ」

ユウキは、突然突きつけられた事実とうろたえた。

「だって、資格の勉強してると思うと悪いし。それに、急だったのよ。手術して一段落してから言おうと思ってたけど、あまりに重いってこと知って、私もびっくりしててね」

その後、母親から、昨年の後半から胃の不調があったこと、今はろくに食べられず体重が十キロ近く減ったこと、抗ガン剤を服用したが副作用が強くてやめたことなどを告げられた。とにかく帰ってきてほしいと強く言われ、電話を切った。

ユウキはすぐに実家に戻らなくてはと思い、瀬名に父親が病気になったことを言った。瀬名には仕事のことは気にしないでいいと言われ、ユウキはすぐに荷物をスーツケースの中に仕舞った。

翌日の早朝、瀬名の店を出た。瀬名には、また戻ってきますと最後に告げた。



\*

高崎に向かう電車の中で、ユウキは母親が言ったことが本当なのだろうかと思った。父親の余命が一ヶ月だということに実感がなかった。医者がたとえそう言ったとしても、それが現実になるという証明など何もなかった。しかし、それが本当であり、自分に父親がいなくなるということがあるならば、そのとき自分はどう受けとめたらよいか心の準備はなかった。失うことの恐怖とそこに直面して生きなければならないという不安に、立ち向かうことができそうになかった。電車で揺られながら、そんなことばかりに不安がっていた。

高崎の駅に着き、タクシーに乗った。普段なら、タクシーなど使わないのに、実家に戻ることに急いでいたのだ。ただ、帰宅しても、どんな顔をして父と向き合えばよいかわからなかった。何を話しかけたらよいか思いつかなかった。そして、父は、どんな態度で自分を迎え入れてくれるのだろうか。何年も顔を合わせていない父親に会うことが、たとえ病気という理由であってもユウキを憂鬱にさえさせた。心から心配しているというよりは、不安のほうが大きかった。

家に着いた。ユウキは以前と何の変わりのない家を見上げた。白い壁の二階建ての家。庭の木々はきれいに刈られ、背丈は低かった。一階と二階の窓は白いカーテンが引かれ、中は全く見えなかった。物音ひとつせず、ひっそりとしているように感じた。

ユウキが玄関のドアノブに手をかけると、鍵は掛かっておらずに開いた。スーツケースのキャスターを浮かせ、音をたてないようにそうっと中に入ると、後ろから声が聞こえた。

「ユウキじゃない。帰ってきてくれたのね、よかった。さあ、中に入って」

母親だった。

「お父さん、ユウキが帰ってきたわよ」

家中に響きわたるような声で言った。

ユウキはばつが悪くなり、神妙な面もちで玄関に突っ立ったままだった。すると、玄関のすぐ横の部屋から人陰が見えた。よく見ると、父親だった。ゆっくりとした足取りでこちらに向かい、白っぽいパジャマの上下に半纏を着て現れた。多かったはずの髪はすっかり少なくなり、ほとんどが白髪だった。母親が言うように十キロも痩せてしまったのか、頬がこけて以前とは別人のように映る。顔には赤みがなく、白のような黄土色のようないかにも不健康そうな顔色をしていた。何より目に力がなく、こちらをぼんやりと見て言った。

「ああ、おかえり」

それっきりだった。ユウキはただいまと小さな声で言い、スーツケースを持ち上げて二階の自分の部屋へ運んだ。母親もユウキの後を追って部屋に入ってきた。

「ユウキの部屋、物置きにしちゃって。布団とかいろんなもの置いてあるし。今、片づけるわよ」

自分の机は窓際の端に追いやられ、布団やビニールを被った扇風機などが置かれていた。

「ただでさえ狭いのに、こんなんじゃ、住めないわよねえ」

母親は布団を担いで隣の部屋に持っていった。机の上には大きな花瓶がいくつも置かれ、ユウキはそのうちのひとつを持ち、

「この花瓶、どうするわけ？」

と聞くと、

「ああ、二階の洗面台の下にビニールがあるから、ひとつひとつ入れてくれる？ 埃がついちゃうからね」

と母の声が返ってきた。

ユウキはビニールを取ってきて、花瓶を仕舞うと全て床に置き、机を廊下側に持っていった。

「机、陽が当たりっぱなしだよ、これじゃあ」

「あら、本も何も置いてないんだからいいじゃない。本棚には布を被せておいたし」

母親はそう言って、入り口の左横に置かれている棚を指さした。

「いいよ、もう、そんなこと。それより、父さんの具合はどうなの？」

ユウキはダウンジャケットを着たまま椅子に座り、背にもたれて体を伸ばした。

「今のところは落ち着いてるけどね。入院だっていつするかわからないし。あんまり食べられないからねえ。食べても戻ってしまうことも多いし。痩せたでしょ？」

母親はさばさばとした口調で言った。さほど悲しそうでもなかった。覚悟をしているのか、病気になるとそういうものだと知っているのか、意外にも冷静であった。

「医者に行って、なんとかならないの？」

ユウキは、さっき見た痩せた父親を見て、どうにかしなくてはと思った。いつまでもこうして、ただ死ぬのを待っているのはたまらなく嫌だった。

「往診してもらってるわよ。そういう先生がいらっしゃって、診てもらってるの。薬だって、副作用が強くないものを今は飲んでるしね。対処でしかないんだろうけど。めまいやふらつきとかあるみたいだから、部屋で横になってることが多いんだけど。動けるときは、少しは散歩したほうがいいって言われてるのよ。ねえ、おまんじゅう買ってあるから食べない？ 疲れたでしょ、リビングにあるから」

そう言い終わると、母親はユウキの部屋を出て階段を下りて行ってしまった。

ユウキは椅子に座ったままだった。慌ててもどうにもならないということなのだろう。窓のほうに目を向けた。小さい頃から眺めてきた庭と、変わらない前の家の壁が遠くに見える。突然、ウグイスの鳴き声が聞こえたような気がして耳を澄ませたが、そんなわけもなかった。まだ一月後半の寒い冬だった。

\*

夕食になると、ユウキとユウキの両親は、かつて一緒に食事をしたキッチンに集まった。ひどくやつれたように見えた父親だったが、パジャマから黒のズボンとグレーのセーターに着替えると、それほどひどくはないのではという錯覚にユウキは陥った。こうして歩いて食卓の椅子に着き、母がついだ湯呑茶碗のお茶を飲んでいる。ただ、それっきりで食べ物には手をつけようとはしなかった。

「ユウキ、コンビニで週刊誌でも買ってきてくれないかな。何でもいいから。こうしてると、暇で時間がやけに長いからな」

父親が自分のことを何も聞きもせず、今までの空白の時間がなかったかのように声をかけてくれることが、ユウキは嬉しかった。

「うん、後で買ってくるよ。女性週刊誌とかがいいわけ？」

「いや、何でもいいよ。経済でも何でも。ユウキに任せるよ」

父親は音をたてて、お茶を啜った。

「水分はよくとってちょうだいよ」

「本当は水のほうがいいんだ」

父はそう言ったが、やはり力のない声であることをユウキはあらためて気づいた。

「そんな、この寒いのに水なんてやめてくださいね、せめてお湯にしてくださいよ」

母は怒ったように言った。

食卓での記憶という、いつも父親が母に向かって話をしている風景しかユウキには思い出せずにいた。自分が読んだ本の内容を語り、仕事での出来事を意気揚々と話している。ユウキが学校の事を話そうとすると、しっかり過ごすよう諭し、すぐに自分の話したい話題を口にした。父親の自己中心的な食卓であった。また、父親とはそういう人間なのだと思い、そんな食卓が窮屈にしか感じられなかった。ユウキは度々、自分は必要とされているのだろうかと不安がった。父親にとっては、自分の妻だけを大切に、息子という大きくなった存在は要らないのではないかと。たぶん、僕のような誇れない息子はいてもいなくても同じようなものだと卑屈に考えたことが多くあった。そして、その誇りとは、父親のような学歴と職業を持つことではないかと、独りよがりな考えに浸った。実際、父親はそうなってほしいと息子に押しつけたこともあり、ユウキ自身、現実そんな路線を歩くことができなくなっていた自分を卑下していた。さまざまな屈折した過去の思い出が頭の中を巡り、ユウキはその過去を放り投げようとしていた。今ある食卓には、過去の父親の姿は微塵もなくなっていたからだ。

「そのおかゆ、食べてくださいよ。ねえ、ユウキ」

母親が強く言うと、父はれんげを持ち、茶碗の中のお粥をゆっくりとかき混ぜた。

「ヘルパーの資格とれそうなの？」

重苦しい空気を変えるかのように、母は言った。

「そうだな、ユウキ、実習とかうまい具合いってるのかい？ うちの病院でもヘルパーの資格とってる人いるけどな、とるのはそんなに難しくないけど、苦労は多いって言ってたけどな」

父と母の両方で言われ、ユウキは動揺を隠せなかった。ヘルパーの資格をとるなんて全くの嘘だったなんて、今になって言うことはできなかった。人生の終末に向かっている父と、未来があるのに進歩のない自分。両親の期待をそぐことが怖くて、しばらく口ごもった。

「.....父さんがこんなことにならなきゃよかったんだ。ユウキの将来を台無しにしたんだ」

父は掬ったお粥の入ったれんげを手に持ったまま、小さな溜息をついた。

「そんなことないよ。資格なんて、いつだってとれるんだ。家で過ごすことのほうが今は大事なんだ。父さんのせいじゃ

ないし、そんな資格なんて、今は考えたくないよ」

「そうか……」

父は少し安心したのか、お粥をひとくち、口に流し込んだ。

父親は、過去の父親とは明らかに変わってしまっていた。面影もないが、かつての性格も消えてしまっていた。病気とはこんなにも人を変えてしまうものなのか。ユウキの話聞きいれ、素朴な口調で話しかけてくれる。高圧的なものは何もなく、互いの会話に、相手を思いやる気持ちが込められているのをユウキは感じとっていた。自分も父親の体調を気にし、少しでも穏やかに過ごせるよう言葉を選んでいった。

「今が一番、幸せな時間だよ」

父親が言うと、母親は、

「そんなこと言わないでくださいよ。今までもずっと幸せな時間だったんだから」

と悲しい顔をして言った。

\*

週に一度ほど、医師が往診にやってきた。父は、診察中は部屋に医師以外は入れさせなかった。母親もユウキも毎回落ち着かない面もちで、一階のリビングでお茶を飲み、父親の体に奇跡が起きて回復してくれることを願っていた。

「いつか、みんなで温泉にでも行きたいね」

「三人で？」

「そう、家族で。最後に三人で旅行行ったのは、いつだったかしらね」

母親は宙を見ながら、ぼんやりと言った。まるで叶わない夢を口にしているような言い方だった。

「中学一年のときかなあ、冬、新潟にスキーしに行ったっけ。今くらいの季節だったかな。まあ、いつか、行けるよ。もう少し父さんがよくなったらさ」

「そうね、今日、先生に聞いてみるわ」

「そういえばさ、父さん、仕事やめたわけ？」

「ううん、やめてないわよ、一応。病気ってことで休んでる。病院にはね、胃潰瘍だって伝えてあるの。診断書もね、先生に頼み込んで胃潰瘍にもらったの。一体、何のプライドかしらねえ。ガンになんかなりたくないって思ってるのかしら」

「そりゃ、誰だって病気にはなりたくないよ」

「お父さんのつまらないプライドよ。今までガン患者だってたくさん診てきたはずなのにねえ」

「父さんらしいな」

ハハハッと母親は笑った。

ふと庭に目をやると、ひらひらと舞うように雪が降ってきた。すぐにやんでしまうかと思ったが、次から次へと降って地面に落ちていった。冬の寒さと曇った天候が憂鬱さを増していたが、白い雪が舞い落ちてくる景色に、不思議と心が華やいだ。こんなに降ってくる雪をゆっくりと眺めたことがなかった。ユウキはこたつから立ち上がり、窓際に行って空を眺めた。途方もなく遠くから途切れることなく降ってくる雪。地面に舞い降りては溶けて消えていったが、緩やかな風に乗っているかのように優雅で美しく見えた。

「お父さんに知らせてこようかしら、雪が降ってきたって」

母親が廊下に向かっていってしまってからすぐに、四十代くらいの恰幅のいい医師が現れた。

「雪が降ってきましたね。いやあ、冷え込みますね、今夜は。そちらは、息子さんですか？」

「はい」

ユウキは窓際から離れた。

「すみませんね、こたつに入ってください」

母親が気を使ってこたつの布団を手であげたが、医師は遠慮気味に立ったままだった。

「どうなのでしょう？ 先生」

心配げな顔をして、母親は医師の顔を見つめた。

「今はさほど変わりありませんよ。薬で胸がむかついたり、気分悪いときもあるようですけどね。食べ物を戻してしまったり、喀血したときは、慌てないで体を横にして休ませてください。本当は、入院したほうがいいんでしょうけど、ご本人は家で過ごしたいと言っていますので、その意思是尊重したいと私は思っています。あと、腹部に水が溜まってきているようで、お腹が張っているのを気にしてました。あまり意識させないように、いつもと変わりなく話をしてください」

医師は静かにそう告げて頭を軽く下げると、玄関へ向かっていった。

ユウキは、父親の病状はあまりよくないのだと察した。いつもと変わりなく接するということは、一番大切なことなのだろうと思った。大丈夫かと、ついつい言葉に出してしまいそうになるが、口に出さないようにしよう。そして、ガンと

いう病気は特別な病ではなく、余命などという厳かな問題も、自分なりに消化して生の延長線にあることなのだと思います。ただ、父親が勤め先に胃潰瘍であると知らせたり、職業柄、自分の体のことはよく理解しているということもわかったうえで、父親のプライドや意識を変に深めないような話をしていこうとも思った。

ユウキは父親の部屋に行き、

「雪が降ってきたよ」

と言った。

父親は布団に横たわったまま、

「暖房がきいていて、窓が曇っててよく見えないんだ。少し窓を開けてくれないか」

と言った。

ユウキは、父親に見えるように窓を開けた。

「ああ、ほんとだ、きれいだ……」

父親は嬉しそうな顔をし、やみそうにない雪をしばらくの間見つめていた。

\*

ユウキは父親の看病をするわけでもなく、平坦な毎日を歯がゆく思っていた。医師のいう余命一カ月なんてあてにはならないものだと思った。もう二月になり、母親から事情を聞いてから一カ月近くになるが、父親の病状は深刻になることも快方に向かうこともなかった。昼間は横になったり、気分がいいときはテレビを見たりしていた。散歩をしたいと言ったときもあったが、母親はもう少し暖かくなったらと強く言って聞かせた。少量でも三度の食事はとり、時には嘔吐してしまうこともあったが、それでも寝たり起きたりの繰り返しでそれ以上の悪化を辿っていく様子は、少なくともユウキの目には映らなかった。ただ、痩せて顔色も悪く、生気のない目をしている父親の顔を見るのが、ユウキにとって一番辛かった。けれども、何か思い出になるようなことは作れないのだろうかと思っていた。旅行に出かけることも父親にとっては負担になるだろう。かといって、家の中であらたまったことをし、父親の死期を悟ったかのような態度をとることも嫌だった。何も出来ない。瀬名の店を出てきたものの、何ひとつ父親のために出来ることがないことを苦しく思えてならなかった。父親が自分の病気について詳しく語らなくても、きっと何もかもわかっているのだろう。息子が突然帰ってきたことも……。ユウキは、毎日毎日、父親の生活を見つめ、その日を平穏に終えることを願うことしかできなかった。

晴天の金曜日の午後、父親はユウキに声をかけた。

「散歩いこうか。寒くても、冷たい空気に触れられるだけでもいいから。家にばかりして、変なストレスが溜まるよ」

それを聞いて、母親は嫌な顔を少しだけしたが、あまり遠くに行かないようにとユウキに言って聞かせた。

ダウンジャケットを着、手袋やマフラーを身につけ、しっかりと防寒して外に出た。吐く息は白く、頬にあたる空気は冷えきっていた。ユウキは父の歩幅に合わせてゆっくりと歩いた。

「外はいいなあ。冷たいのが気持ちがいい。暖房ばかりでもよくない」

父親はそう言って、冷たい空気を腹に溜め込むように深く息を吸った。

「冬の景色って殺風景だけど、それはそれでいいもんだ。春になれば新芽が出るんだろうけどね。それまで生きればいいけどな」

「何言ってるんだよ。来年も再来年も、それからずっと生きられるよ。勝手に決めつけないでよ」

ユウキは父親をなだめながらも、不機嫌になった。一日でも先のことを悲観して生きることが無意味なことのよう思えた。それとも心の準備をしておかなくてはいけないものなのだろうか。先の見えない死に向かって、ただ覚悟をして待つことが最適な選択だというのだろうか。父親自身が最終的に心に抱くことだとしても、周りはマイナスの感情を持ちたくない。少なくともユウキはそういった感情で父親を見ることも、父親にそう思って生きてもらいたくもなかった。そんなことを考えてしまう自分は自分勝手であり、父親のことを本当に考えていないこともわかっていた。希望を持ってほしいというのも、自分の身勝手な考えに決まっている。

「僕は、父さんの病気がよくなってほしいし、元気になって働けるようになってほしいよ」

つい、そんなことを口にした。

「……ああ。可能ならそうなりたいよ。けどなあ、病人は医者にはなれないんだよ。医者が病人になれても、もう元に戻るって難しいんだよ」

力ない声で言った。

「よくなればいいんだよ」

「……まあな」

ユウキは病気がよくなりさえすればいい、それだけだった。訪問してくる医師の言葉や母が言う事も、どちらも信用

できなかった。そして、また、父親もどんな苦しい感情のもとで毎日を送っているのか理解できなかった。食事をよく食べていると思えばいいように見え、嘔吐してしまうと悪いように見えた。また、一日横になっていたり、顔が痩せたように見えると、ひどく状態が悪いように感じた。そんな尺度でしか、父親の状態を把握できなかった。

五分ほど歩いたところに公園があり、ベンチに座った。空は青く冴え渡っていたが、寒さのせい子供一人も遊んではいなかった。父親は、公園の滑り台やブランコを眺め、白い息をフーッと吐いた。

「ユウキと昔、遊んだことあったな。ブランコから落ちたことがあった。俺が後ろから押してたら、前のめりになって落ちて、顔に怪我をしたことがあったな」

「この公園で？」

「ああ」

「全然覚えてないよ」

「四歳くらいだったかなあ。元気がよくなってね、可愛かった……」

ユウキは、父親が昔の話をするなんて初めてのことだった。それが、なんだか心細く、哀しくもあった。ユウキは沈黙のまま、誰もいない公園を呆然と見ていた。すると、電線の上にいるカラスがおりてきて、滑り台近くの地面をつついていた。

「ユウキは……、将来、何になりたいんだ？」

「え？」

ユウキは父親の顔を見た。

「何になりたいのかと思ってね、しっかり話をしたことがなかったから……」

「僕は……、……まだ、何も決まってないよ。これから考えるよ。どういう方向にしようとか、そういうことも決まってないよ」

「そうか……。決まってなくていい。立派に進路が決まってるほうが恐ろしい。傲慢な人間になんか、なるんじゃないよ。そう……。俺のような人間にならなければいいさ」

「そんな……」

ユウキはそう言って、口ごもった。

「当たり前のように、当たり前の幸運だけで、生きて、満足してたら、何にもないじゃないか。自分だけが満足して生きてればいいんじゃないんだよ。人のために尽くすことで、その人の価値なんて決まっちゃうんだからさ」

今までの父親ではないように、ユウキには思えた。こんなことを言う人ではなかったのだ。父親は自分自身を過剰に立派な人間だと思っていると、ユウキはずっと思ってきた。父親の不満は息子である自分が思うように将来を決めてくれないこと、それだけだと思っていたのに、なぜ、今になってこんなことを言い出すのか。ユウキは素直に受けとめられず、何を言っているのかわからなかった。

「そろそろ、帰るか、お母さんが心配する」

ユウキより先に父親はベンチから立ち上がり、公園の出口へと向かってゆっくりと歩き出した。今にも消えてしまいそうなその頼りなげな後ろ姿を、ユウキは慌てて追いかけた。父親の隣を歩きながら、このままの時間がずっと続いてほしいと願ってやまなかった。

帰宅すると、母が玄関にやってきて言った。

「あなた、胃潰瘍の調子はどうですか？って。医院長の丸井さんから電話あったわよ。仕方ないから、まだ調子がよくないからって言っておいたけど、いいの？ お見舞いのことも言ってたけど、断っておいたわよ。こんな嘘、ずっと続けておいていいの？」

「いいんだ、いいんだ。丸井君だってね、気づいてるよ。放っておけばいいさ」

父親ははにかみながら、手袋を脱いだ。

「……そう。本当に大丈夫かしら」

母親はそう言いながら、父親の肩に手を掛けてダウンジャケットを脱ぐのを手伝った。

「……俺はそういう人間だった。胃ガンも胃潰瘍もたいした嘘じゃないんだから」

昔に戻ったように鼻でバカにするように笑いながら、父親は部屋に入っていった。





\*

ユウキのもとに、瀬名から電話があった。

今は自分一人で頑張っているということ、家で父親との時間を大事にしてほしい、一段落したら店に戻ってきてほしい、といった内容だった。

ユウキは実家に戻ってきてから、瀬名の店のことをすっかり忘れていた。店を継ぎたいと申し出たことも、遠い過去のように思えていた。自分が出てきてから、瀬名は店をたった一人で切り盛りしている。そのことを思うと、戻りたい気持ちも逸るが、今の父親の事を思うと、ここからとても離れられそうになかった。

ユウキはリビングにいる母親のもとへ行き、聞いた。

「父さんの状態って、どうなの？ 毎日変わらないように見えるけどね」

「ユウキ、あんた、バカね」

母親はクスリと笑った後、言った。

「お父さんは、治療が厳しいから、家で過ごしているのよ。それがわからない？ もしね、よくなるってわかってたら、入院してもらおうわ。手術だって、形だけでしたわけじゃないんだし。いつどうなったって、わからないの。だから私だって、買い物行く程度にして、出かけたりしないの。普通の生活をするのが、お父さんにとって一番大切なのよ」

「.....でも、.....でも、もっと違う医者に診てもらえば、何かいい方法があるかもしれない」

「もうやめてちょうだい、そんな話」

そう言うと、母親は顔をくしゃくしゃにして怒りながら、目にいっぱい涙を溜めた。

「私が、もっと早くに気づいて医者連れてってればって、後悔ばかりよ。あの人、頑固だから、ストレスが溜まるだけだなんてごまかして。そのくせ胃の調子が悪かって、そればかりだった。ああ、バカみたい。ほんとにバカなのよ。私もあの人も。過信しすぎてたって。だからこんなことになっちゃって.....」

母親は、テーブルの上に置いてあるティッシュを手にとって顔中を覆い、泣き始めた。

ユウキは何も言えなかった。ずっと家から遠のいていた自分。去年の父の様子も何も見てきていない。ここまで一緒に過ごしてきた母だから、父親のことをよくわかっているのだろう。自分は勝手な生活を送り、勝手な理由で家に帰らなかった。病気が快復する可能性を信じたかったが、母の態度で期待はすぐに崩れていった。

「ねえ、僕にできることって何かある？」

ユウキは切実な思いだった。今まで家族にできなかったことを、この数カ月でもしようと思った。しかし、母は冷淡に言いきった。

「ユウキにできることはね、家にいること、普通の態度でいることよ。過剰にお父さんを心配するような態度はとらないでね。あの人、敏感だから」

ユウキは黙って頷いた。

「それから、髪が伸びかけておかしいわ。床屋に行って切ってきてきなさいよ。もうすぐ春になるんだし」

そう言われ、無意識に髪の毛を掻きあげた。瀬名のところで坊主にして以来、一度も床屋に行っていない。前髪はまだ短かったが、横は中途半端に伸びて耳に髪が被さっていた。母親の、もうすぐ春になる.....という言葉が、父親にとっても早い季節に感じ、ユウキは少し先にある微かな希望を抱き、床屋に足を向けて玄関を出た。

父親は、嘔吐をしてしまったり、必要があって話をするときには、必ずユウキの母親を呼んだ。ユウキを呼ぶときは少なかったが、気分のよい夜はオセロの相手をさせた。ユウキが幼い頃に楽しんだオセロに向かっている父親の顔は、童心

に戻ったようににこやかであった。ユウキもそれを見て、自分が子供だったときのことを思い出した。かつて父親と遊び、何の負担も不安もなかった時代の頃だ。摩擦などなかった。あの時の記憶の断片が蘇り、今の時間が懐かしさで胸がいっぱいになりながらも、その逆に淋しさが込みあげてきた。こんな時間がずっと続けばいいと思いながら、ユウキはそのひとときに向かい合った。それが終わり、父の部屋を出るときに、また明日も明後日も同じ時間と同じ事をして過ごせればいいと心から願った。

空気は徐々に暖かくなっていった。妙に体も温かくなり、冬服も暑く感じるくらいの日が増えていった。体がむずむずし、外の空気に触れたくなかった。近くのショッピングセンターまで歩いて買い物をしたり、レンタルショップに映画のDVDを借りに出かけたりした。自室にこもってパソコンを眺める時間も減っていった。

ある日、コンビニまで歩いていくと、桜の木から花が開いての目についた。ふと立ちどまり、木の上を見上げた。ほんの一部ではあったが、薄いピンク色の花卉が広がっている。

「あと、どれくらいで全部咲くだろう……」

ユウキは父に満開の桜を見てほしかった。もっと気温があがれば、一気に花が咲くだろう。毎日晴天で暖かくなるといい。父親に春を少しでも感じてほしい、暖かくなれば体も安定するにちがいない。ユウキはそう思った。

家に帰ると、父親の部屋から声が聞こえた。

「苦しい、体が壊れていくみたいに、あちこちが痛い」

「いいから、お薬飲みましょうよ、ね」

母親の声が聞こえた。

父親が初めて苦痛を口にしているのを聞いたユウキは、胸の鼓動が高鳴った。自分にはそんなことを言ったことは一度もない。何も出来ないことはわかっていたが、父親の苦痛を少しでも理解したかった。けれども、父は自分を頼りにしているわけではなく、弱った姿を見せたくないのだ。いつまでも父親という立場でいたいにちがいない。そう思うと、そばに寄って余計な負担をかけるようなこともできそうになかった。

雨も降らずに一週間たち、一気に桜の花が咲いた。満開になった。ユウキは十一時頃に食卓に現れた父親に言った。

「桜、見に行かない？ 車で乗せてくよ」

父親は少し黙ってから、

「ああ、いいよ。じゃあ、運転頼むよ」

と言った。

そばにいた母親が、

「遠くは行かないでくださいよ。近所でね。薬もちゃんと持ってね」

と、口を出した。

父親はすぐにパジャマからグレーのズボンとブルーのトレーナーに着替え、財布や薬の入ったバッグを腕に抱えた。ユウキは車庫へ行き、エンジンをかけて玄関の前で停まって降り、父親のそばに駆け寄った。父親が少しよろめいたので、ユウキは腕を強く持って支えた。

「無理しなくていいよ……。体調がいいときに、また見にいけばいいよ」

ユウキは心配げに父親の顔を覗き込んだ。

「いや、大丈夫だ。車だから、横になってればいい」

そう強く言い、ユウキから離れて一人で車まで歩き、ドアを開けた。

「おい、早く行くぞ」

ユウキは車に駆け寄って乗り込んだ。

父親は助手席に乗って、斜めに倒した椅子に体を横たえた。ユウキは車をゆっくり出し、大通りに向かった。

「河原のところに桜咲いてたから、近いし、そこがいいかと思ってるんだけど」

「……そうか、ユウキに任せるよ」

父親は仰向けに横たわり、表情ひとつ変えずに言った。

ユウキは急いだ。家から五分くらいのところに河原がある。父親の様子を見ると遠くの公園に行くことは出来そうになく、河原に咲いている桜並木しか思い当たらなかった。大通りを南に右折して下ると、すぐに河原に着いた。その入り

口から小道があり、桜並木が続いている。車が一台ほど通れる広さの道路ではあったが、人が歩いているだけで混んではなかった。

ユウキは車の速度を遅くし、小道を進んでいった。満開の桜の木々が、車の天井を作っていた。ユウキは助手席の窓を開けた。暖かい風がゆっくりと入ってきて、それとともに桜の花びらも車内に入ってきた。

父親は仰向けのまま、窓から見える桜を見つめていた。

「きれいだなあ……。もう、今年で最後になるんだなあ」

「そんなことないよ、来年だって見れるよ」

ユウキは父親を諭しながら、自分も車窓から薄いピンク色の桜の花々を眺めた。車の上に舞いながら落ちてくる花びらも、ずっと続いている柔らかな色の桜の木々も、優しく自分たちの車を迎え入れてくれるかのように思えた。

ユウキはふと助手席を見ると、父親の目から涙が流れ落ちているのに気づいた。それを知ってか、父親は涙を手のひらで拭い、言葉を詰まらせながら言った。

「……俺は、胃ガンの患者をたくさんみてきた。重い患者には……。胃潰瘍ですって平気で言ってたよ。俺は当たり前みたいな顔をして……。そういう患者は、他の病院に行ってしまった……。俺は逃げてたんだ、患者から。……。俺は、逃げられないって知ったよ。病気になってわかったんだ……」

ユウキは黙ったまま、車を進ませた。

道路には、子供連れの家族が上を見上げ、談笑しながら歩いている。一人歩く老人も、はしゃぎまわる子供たちも、それぞれがそれぞれの形で桜の下を歩いている。穏やかな時間のはずが、今一瞬に長い後悔をしている父親が自分の横にいて、何も言葉に出来ない自分がある。長い沈黙の後、

「……ああ、きれいだ……」

と父親が呟いた。

その夜、父親はトイレに行ってから部屋に戻り、三十分もしないうちに息を引き取った。母親は、部屋で寝ていたユウキを起こして、ひと通り説明をし、

「呆気ないものよね」

と言った。

\*

ユウキは、棺の中の父親を長い間見つめていた。何かを語ってくれるわけでも、皮肉を言うこともなかった。かつて説教をしてくれた父親も、今はもう何も言ってくれることはなかった。散々憎んでいたものの、もうそんな相手もいなくなった。何より、自分には父親という存在を失った。ユウキはそれを一番淋しく感じていた。誰が代わりになってくれるわけでもない。これからは、母親しかこの家にはいなくなる。そして、一人で歩いていかななくてはいけない。心細かった。まだ自分は子供のように幼い精神のもとにいるような気がしてならなかった。なんだかんだ言って、本当は父親のことを頼りにしていた。父がいることで、自分は憎んだり恨んだりしながら存在していたのだ。しかし、もうその必要はなくなったのだと思うと、淋しくてたまらなかった。

ユウキは自然と涙が零れ落ちてきた。大粒の涙が次から次へと頬をつたった。

「桜も見れたし、お父さんね、喜んでるわよ。3カ月間も、すごくいい時間過ごせたって思ってるわ。ユウキが帰ってきてよかった、本当によかったわ」

母親は傍らで夫の顔を見つめ、そう言った。ユウキも自分自身が出来ることはやったのではないかという気持ちでいた。桜と一緒に見れたことが、唯一の慰めでもあった。

通夜も葬儀も淡々と行われた。

父親の勤め先の仲間もやってきたが、亡くなったことがどうということでもなく、儀礼的な態度で事を終えた。父親の友人や仲間、親戚も、ユウキには他人のように思えてならなかった。そして、関係が終わってしまうと、そういうものなのだろうと思った。

「私、未亡人になっちゃったわ。そういう視線で見られてるって、なんだか感じるの。ああ、本当に嫌だわ。ユウキにはわからないわよね。所詮、他人は他人なんだって思うのよね。これからどうしようって思うけど、家もあるんだから、考えたって仕方ないし、ユウキはユウキの人生あるし、ああ、とにかく疲れたわ。五十八歳で死んでしまうなんて、思ってた。あと二十年私が生きてとして、夫婦で旅行なんて叶わなかった……。定年してからの夢なんて、あっという間に消えちゃったわ……」

一段落して何もかも片づく、母親は独り言をユウキに言って聞かせた。ユウキは頷きながらも、これからどうすべきか考えた。瀬名の店に戻って、またアルバイトをしようか。そうして、もっと先のことを考えようか。今は何のプランもなかった。

「とにかく、ユウキ、いつまでもめそめそしてたりしてちゃダメよ。あなたの人生はこれからなんだからね」

母親は涙目になりながら、ユウキに強く言って聞かせた。

ユウキは瀬名の店に戻ることにした。三ヶ月もの間、父親と充分過ごせ、父が亡くなってからそれほど大きな後悔はなかったからだ。母親はヘルパーの資格をとるよう学校に戻ってほしいと言ったが、ユウキは、なかなか取得できるものではないとうやむやな嘘をついた。ただ、今までのアルバイトが中途半端のままで戻ってきたことを告げ、家を出た。母親を一人残してしまうのは不安であったが、

「自分の人生を考えなさい」

と何度も言った言葉を信じた。

瀬名の店の前で、足をとめた。店頭には十個ずつほどそれぞれの弁当が並べられていた。以前より品数が少なかった。値段も三百五十円になっていたが、売れている気配はなかった。そのまま店のドアを開け、

「瀬名さん、帰りました」

と、ユウキは大きな声で言った。

「ああ、時田君かい？ お父さん大丈夫かい？」

居間から瀬名が出てきて、家にあがるよう手招きした。ユウキはスーツケースを持ち上げ、手前の廊下に立てかけた。

「父は亡くなりました。でも、いい時間を過ごせたと思ってます」

「.....そうか、大変だったね。もう、こっちには戻ってこないんじゃないかと思ってたんだよ」

瀬名はそう言って、淋しそうに笑った。

ユウキは店のほうがどうなっているのか詳しく聞きたかったが、その前に瀬名が座るよう言った。

天気がよく、暖かな光がテーブルの上を眩しく照らしている。微かな風が窓ガラスにあたり、カタカタと音をたて、隙間からぬるい風が部屋に入ってきていた。するのは風の音だけだった。

「時田君、店のほうやめようと思ってるんだ。せっかく帰ってきてくれたんだけど。弁当も売れないし、俺も疲れて半分作るのがやっとなんだ。時田君がいない間、知り合いがね、食品工場のほうで人手が足りないから、働いたらどうだって話があつてね。パートだけだね。俺はこの店を閉めて、そっちで働こうと思ってるよ。時田君には本当に悪い、申し訳ない。で、それで、時田君もその工場で働かないかと思ってね。その話がしたくってね.....」

「.....僕は.....」

ユウキは、突然の話にどうしていいか決めかねた。断るのは簡単だった。だが、瀬名が店を閉める以上、ここにいるわけにもいかなかった。実家にいたほうがよかったのではないかという気持ちが頭をよぎった。

「ここにしばらくは住んでもらっていいし、今は仕事あるっていうだけでありがたいもんだしね。まあ、ゆっくり一日考えてもらっていいから」

ユウキは二階にのぼった。部屋は以前と変わりがなく、窓からは前の家の壁しか見えなかった。

ユウキは散々迷ったものの、瀬名の知り合いが紹介してくれた食品工場で働くことに決めた。パートで働くこととなったが、ユウキにはそれ以上の欲はなかった。瀬名の家にはしばらくは世話になるが、いずれは出てアパートを借りようと思った。ユウキは大きな変化を不思議と感じてはいなかった。父親を亡くしたということ以外は、それほど苦しくもなかった。ただ、いまだ不安の中にいることは確かだった。これから先のこともわからず、これから歩むべき道も決めることができなかった。

「そのうち正社員にしてくれるかもしれないし、真面目にやれば、悪いことなんて起こらないよ」

瀬名は明るく言い放った。

それでも、ユウキは将来のことが怖かった。先のことを案じるなど馬鹿げていることもわかっていた。けれども、どうしても心を定めることができない。いつまでも闇の中にいるような気がしていたが、瀬名の言うように、今は真面目に働くことが一番だろうと思った。

ユウキは疲れて布団の中に潜っていた。浅い眠りから覚めると、あたりは暗かった。ガタガタと音のする窓のほうを見ると、雨が吹きつけている。電気をつけ、慌てて白いカーテンを引っ張った。

時計を見ると、ちょうど午後十時になるところであった。



### エピローグ

ユウキは仕事にも慣れ、真面目に日々を過ごしていた。仕事もかつてアルバイトをしていたときのようによく勤めていた。瀬名の家から職場には通っていたが、瀬名は文句も言わずに住まわせてくれていた。瀬名の店はすっかり閉まり、瀬名自身も職場での仕事に精を出す毎日だった。ユウキは、来年のはじめには瀬名の家を出る意志を固めていた。

秋が近づき、だんだん涼しくなってきた頃、ユウキは瀬名の車を借り、買い物に行こうと東浦和駅近くの道路を走っていた。近くには大型のパチンコ店が建ち、ユウキは建物から下がった垂れ幕に『最強の日！』と書かれた赤い文字を見た。かつて自分がはまりこんでいたパチンコに、今日も勝った負けたと一喜一憂している人々がいるのだと思った。あの生活には戻りたくないし、あのときの自分は怠惰で臆病だったとつくづく思った。そんな気持ちとともに、民野香織のことも思い浮かんだ。あの女から離れるまで、それほど年月があったわけでもないのに、遠い過去の人のようにさえ感じた。あのアパートを出てから、さまざまなことがありすぎたのだ。ユウキは大通りをまっすぐ走りながら、なぜか、民野香織の姿を目で探していた。

「このへんだったな……」

そして、自分が居座っていたアパートも目で探した。すると、草の生えていない空き地を見つけた。たしか、ここではなかっただろうか。ユウキはその場所を不思議に思い、近くのスーパーの駐車場に向かった。車から停め、そこまで歩いていった。

「まだ、あついなあ」

ユウキは照りつける太陽を眩しそうに見あげ、額に掛かる髪を掻きあげた。

空き地の前で立ちどまった。最近になって新しく入れられたような土が、平らに整えられている。ここではなく、この近所だったのだろうかとあたりを見回していると、白い菊の花束を持った四十代くらいの女性が声を掛けてきた。

「どちらさんですか？」

「え？」

ユウキはびっくりしたような顔をした。

「アパートに住んでた方ですか？」

「ああ、前に……。ここにあったはず建物はどうしたんですか？」

「火事でなくなりましたが、一ヶ月前くらいかしらね。私の姪が一人だけ亡くなったんですよ。二十六歳で、若かったわ。タバコが原因じゃないかって。出火場所が姪っ子の部屋だったらしいから」

そう言って、その人は座り込み、菊の花を空き地に向けて置いた。

「もしかして……、民野香織さんって方じゃないですか？」

ユウキがそう言うと、その人はえっという顔をして立ち上がった。

「お友達？ もしかして彼氏さんとか？」

「いえ……、ちがいますが」

「そう。香織ちゃんって子よ。小さい頃から可愛い子でね。よく行き来があったからねえ。あの子は勉強もよく出来たしね。上のお姉ちゃんより優秀だったし、大学だって一流のところ入ったし、文句ない子だったんだけどねえ……」

民野香織はいじめられたことに苦しみ、中卒ではなかっただろうか。ユウキは耳を疑った。

「お父さんが、昔からパチンコ屋経営してて、香織ちゃん、子供の頃からパチンコ台ばかりいじって遊んでたのよ。家にパチンコ台があつたわね。私は、外行って遊びなさいってよく言ったものだけど、あの子は他の子と遊んだりしないようなところがあつたわねえ。可愛い顔してたし、勉強もできて欠点がないような子だったけど、パチンコに変な執着があつたわね、親の影響かしら……。この何年かは不景気で、パチンコ屋の経営も危ないって聞いてたし、あの子が大学



出てから何してたか全然わからなかったけど、ここに住んでるってだけ聞いてたわよ。このアパートもお父さんの経営だったんだけど、潰れちゃって。私の姉も、娘が亡くなったってすごく落ち込んでるわ……。タバコとか吸うような子とは思わなかったけど、他の人を巻き込まなくてよかったなんて、私、冷たいけどそう思うときもあるのよ。ただ、やっぱりかわいそうでね……」

その人は立ち尽くし、アパートがあった場所を呆然と見つめていた。

「子供の頃知ってるからかしらねえ。……たまに、花をあげに来て、香織ちゃんのこと思い出すのよね」

ユウキも目の前を見つめた。

……民野香織は死んでしまった。

あの女を抱いたことを思い出した。自分のことを愛しているとも言ってくれた。そんなことが鮮明に蘇ってきた。どんな生い立ちで、どんな嘘で固められていても、もう民野香織はいないのか。自分はその一瞬であったものの、あの女を愛していた。いや、本当に愛していたのだろうか。今となっては、全てが幻のように思える。民野香織が一体どんな人間であったのか、本当のことはわからなかった。民野香織の叔母の言葉から探しても、かけらもわからない。今まで関わった民野香織との出来事も、パチンコに親しんで育ったという以外、繋がらなかった。とにかく、もういないのだ。

ユウキは民野香織の叔母だという人に小さく会釈をし、その場から離れた。

民野香織が強く言っていた、自分の責任とは、こんな死もそう言って片づけてしまってよいのだろうか。ユウキにはどれが正しいのかわからなかった。ただ、もう存在しないという事実で悲しくなり、車に入ってハンドルを握って泣いた。真実なんてどうでもよい気がして、涙だけがとめどなく流れた。

駐車場には次々と車が入ってきた。どこか遠くからサイレンが鳴り、周りを横切る人々の談笑する声が聞こえた。耳には周囲の音だけが届いたが、誰もユウキの姿に気づく者はいなかった。

午後五時半をまわっていた。

了